小学校教科書発行者

各教科書発行者のホームページには，内容解説資料や年間指導計画案等，参考になる情報がたくさん掲載されています。是非，参考にしてください。

発行者	各社URL
東京書籍株式会社	https://www.tokyo-shoseki.co.jp/
大日本図書株式会社	https://www.dainippon-tosho.co.jp/
開隆堂出版株式会社	https://www.kairyudo.co.jp/
学校図書株式会社	https://gakuto.co.jp/
株式会社三省堂	https://www.sanseido-publ.co.jp/
教育出版株式会社	https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/
一般社団法人信州教育出版社	http://www.shinkyo-pub.or.jp/
株式会社教育芸術社	https://www.kyogei.co.jp/
光村図書出版株式会社	https://www.mitsumura-tosho.co.jp/
株式会社帝国書院	https://www.teikokushoin.co.jp/
株式会社新興出版社啓林館	https://www.shinko-keirin.co.jp/
日本文教出版株式会社	https://www.nichibun-g.co.jp/
株式会社文教社	https://www.bunkyosya.co.jp/
株式会社光文書院	https://www.kobun.co.jp/corp/profile/
株式会社学研教育みらい	https://gakken-kyoikumirai.co.jp/
あかつき教育図書株式会社	https://www.aktk.co.jp/

本冊子はダウンロードしてお使いください

本冊子は，教科書研究センターのホームページから教科別にダウンロード出来ます。
お知り合いの先生に是非ご紹介ください。
必要な教科の部分をダウンロードしてお使いください。

学習者用デジタル教科書活用事例集

教科書研究センターでは，学習者用デジタル教科書の活用事例集を作成いたします。
本冊子と共に参考にしていただければと思います。（令和４年11月刊行予定・ホームページに掲載予定）

“新しい”教科書の使い方
―よりよい授業づくりのために― 小学校

令和４年10月

公益財団法人　教科書研究センター
〒135-0015 東京都江東区千石１丁目９番28号
電話03-5606-4311　FAX.03-5606-3044
URL: https://textbook-rc.or.jp

教科書研究センターHP

“新しい”教科書の使い方

―よりよい授業づくりのために―

小学校

目 次

はじめに 等 ―― 2
国語の教科書の使い方 ―― 8
社会の教科書の使い方 ―― 14
算数の教科書の使い方 ―― 22
理科の教科書の使い方 ―― 28
外国語（英語）の教科書の使い方 ―― 36
道徳の教科書の使い方 ―― 42
教科等横断的な学習のための
教科書の使い方 ―― 48
資料 ―― 54
委員名簿 ―― 55
小学校教科書発行者一覧 ―― 56

令和４年10月

公益財団法人 教科書研究センター

はじめに

団塊世代の大量退職により，若手教師が増えている近年の学校現場では，教科書の使い方がわからないという教師の存在が懸念されております。一方，教科書編集の現場からは，教科書の編集意図が現場に充分に理解されないまま使われていることを危惧する声が聞かれます。令和２（2020）年度からの新教育課程の実施，デジタル教科書の導入等の状況を踏まえ，教科書研究センターでは，教科書をめぐる学校現場の実態を検証し，すべての教師が，児童生徒にとってよりわかりやすく，より興味深い授業を実現するためには教科書をどう使えば効果的なのかについて調査研究を行っております。本冊子は，その研究成果の一端として，特に，若手の教師の皆様のために特定の教科について，新学習指導要領の趣旨に沿った教科書の使い方，その例などを示したものです。

本冊子を活用して，教科書をより効果的に使用していただければと思っております。

公益財団法人　教科書研究センター
授業における教科書の使い方に関する調査研究委員会
委員長　　新井　郁男

新学習指導要領（平成29（2017）年改訂）について

「社会に開かれた教育課程」の実現をめざす新しい学習指導要領は，育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」「思考力，判断力，　表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱に整理するとともに，主体的・対話的で深い学びによる授業改善，及び，カリキュラム・マネジメントのもとに学校改善を求めています。このうち，「主体的・対話的で深い学び」については，「学び」そのものが「アクティブ」であるとの立場に立って，「わかった」「おもしろい」「じっくり考えた」との思いが生まれる授業の実現をめざすものであります。それぞれ個別にあった知識が相互に結びつく授業。見通しをもって学びのプランを練り，試行錯誤を重ねながら粘り強く取り組む力が育つ授業。共に考えることを通して新しい発見やアイデアが生まれる授業。生活や人生に生かす力を育む授業。これら授業の実現を支えるのがカリキュラム・マネジメントであり，組織的かつ計画的に教育課程や授業の質の向上を図る営みとしてあります。教科書は，これら新しい学習指導要領のめざすところを具体的に表したものであり効果的な活用が期待されます。

副委員長　天笠　茂

学習指導要領と教科書の関係

教科指導は学習指導要領に沿って行われるものですが，毎時の授業の前に学習指導要領に目を通さなくてもよいように，教科書を用いて指導をすれば，必修内容を漏らすことなく，学習指導要領の目標が達成されるように教科書はつくられています。また，年間の限られた指導時数で効率的に無理なく指導ができるように，単元の配列や各単元の指導にかける時数などにも教科書は配慮されています。つまり，教科書は学習指導要領のねらいをふまえた授業にもっとも適した主たる教材であるといえます。子供の実態に応じて指導の内容や方法に手を加える場合にも，必ずよりどころとすべき本が教科書です。

教科書の編集方針とは？

教科書発行者の編集者や編集委員は「学習指導要領　解説」をよく読み、しっかりと把握した上で、編集会議等で教科書の編集方針を議論し決定します。学習指導要領は約10年ごとに改訂されます。

文部科学省HPより

学習指導要領の変遷

昭和33～35年改訂
教育課程の基準としての性格の明確化
（道徳の時間の新設、基礎学力の充実、科学技術教育の向上等）（系統的な学習を重視）
（実施）小学校：昭和36年度、中学校：昭和37年度、高等学校：昭和38年度（学年進行）

昭和43～45年改訂
教育内容の一層の向上（「教育内容の現代化」）
（時代の進展に対応した教育内容の導入）（算数における集合の導入等）
（実施）小学校：昭和46年度、中学校：昭和47年度、高等学校：昭和48年度（学年進行）

昭和52～53年改訂
ゆとりある充実した学校生活の実現＝学習負担の適正化
（各教科等の目標・内容を中核的事項に絞る）
（実施）小学校：昭和55年度、中学校：昭和56年度、高等学校：昭和57年度（学年進行）

平成元年改訂
社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成
（生活科の新設、道徳教育の充実）
（実施）小学校：平成４年度、中学校：平成５年度、高等学校：平成６年度（学年進行）

平成10～11年改訂
基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの[生きる力]の育成
（教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設）
（実施）小学校：平成14年度、中学校：平成14年度、高等学校：平成15年度（学年進行）

平成15年一部改正
学習指導要領のねらいの一層の実現
（例：学習指導要領に示していない内容を指導できることを明確化、
個に応じた指導の例示に小学校の習熟度別指導や小・中学校の補充・発展学習を追加）

平成20～21年改訂
「生きる力」の育成、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成のバランス
（授業時数の増、指導内容の充実、小学校外国語活動の導入）
（実施）小学校：平成23年度、中学校：平成24年度、高等学校：平成25年度（年次進行）
※小・中は平成21年度、高は平成22年度から先行実施

平成27年一部改正
道徳の「特別の教科」化
「答えが一つではない課題に子供たちが道徳的に向き合い、考え、議論する」道徳教育への転換
（実施）小学校：平成30年度、中学校：令和元年度

平成29～30年改訂
「生きる力」の育成を目指し資質・能力を三つの柱(※)で整理、社会に開かれた教育課程の実現
(※)「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」
（「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の視点からの授業改善、カリキュラム・マネジメントの推進、小学校外国語科の新設等）
（実施）小学校：令和２年度、中学校：令和３年度、高等学校：令和４年度（年次進行）
※小・中は平成30年度、高は令和元年度から先行実施

文部科学省HPより

● 新しい教科書観

前回の学習指導要領の改訂（平成20年（2008年））は今回の新しい教科書に至る転換点となりました。その背景には，国際学力調査PISAの点数低下という結果を受けて，それまで進められてきたいわゆる「ゆとり教育」に対して，「確かな学力」が叫ばれるようになったことがあります。このような動向を受け，この改訂では，授業時数の増加など「脱ゆとり」が図られるとともに「詰め込み教育」を克服する形で，「生きる力」という基本理念が再確認され，その手立てとして「思考力・判断力・表現力等の育成」という方向性が示されました。

これ以降，教科書は発問の仕方を工夫したり，基本的な学習の流れの中の随所に児童生徒の主体的な学習活動を促すようなコーナーを設けたりするなど，学習活動の起点としてのプラットフォームという性格を強めていきます。それに伴い，「紙の教科書」の枠内ではありますが，サイズの拡大，ページ数の増加など体様面でもデラックス化していきます。

巻頭に教科書理解を促すページ（基本方針をうたうページ，全体構成を見渡せる図表，本文で使用される記号一覧等）（オリエンテーションページ）が特設されるようになりました。また，「補充的な学習」「発展的な学習」の内容などが教科書に盛り込めるようになりました。

教科書観の転換
（「教科書の改善について（報告）」教科用図書検定調査審議会 平成20年12月25日）

……「児童生徒は、教科書に記述されている内容をすべて学習しなければならない」とする、従来型の教科書観については、「個々の児童生徒の理解の程度に応じて指導を充実する」、「児童生徒が興味関心を持って読み進められる」、「児童生徒が家庭でも主体的に自学自習ができる」といった観点から、教科書に対する考え方を転換していくことも求められる。

このため、文部科学省や教科書発行者においても、従来型の教科書観から、このような考え方へ転換が図られるよう、教育委員会、教員、保護者等に対し周知に努め、一層の理解を促すことが必要である。

平成10～11年改訂	**基礎・基本を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの[生きる力]の育成** （教育内容の厳選、「総合的な学習の時間」の新設） （実施）小学校：平成14年度、中学校：平成14年度、高等学校：平成15年度（学年進行）
平成15年一部改正	**学習指導要領のねらいの一層の実現** （例：学習指導要領に示していない内容を指導できることを明確化、個に応じた指導の例示に小学校の習熟度別指導や小・中学校の補充・発展学習を追加）
平成20～21年改訂	**「生きる力」の育成、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成のバランス** （授業時数の増、指導内容の充実、小学校外国語活動の導入） （実施）小学校：平成23年度、中学校：平成24年度、高等学校：平成25年度（年次進行） ※小・中は平成21年度、高は平成22年度から先行実施
平成27年一部改正	**道徳の「特別の教科」化** 「答えが一つではない課題に子供たちが道徳的に向き合い、考え、議論する」道徳教育への転換 （実施）小学校：平成30年度、中学校：令和元年度
平成29～30年改訂	**「生きる力」の育成を目指し資質・能力を三つの柱(※)で整理、社会に開かれた教育課程の実現** (※)「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」 （「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の視点からの授業改善、カリキュラム・マネジメントの推進、小学校外国語科の新設等） （実施）小学校：令和２年度、中学校：令和３年度、高等学校：令和４年度（年次進行） ※小・中は平成30年度、高は令和元年度から先行実施

文部科学省HPより

● 新教科書の特徴

平成29年に新学習指導要領の告示があり，子供たちに「生きる力」を育むという目標は変わらない一方，社会の変化を見据えた，新たな学びの考え方が提示されました。子供たちに必要な資質・能力が三つの柱（知識及び技能／思考力，判断力，表現力等／学びに向かう力，人間性等）として整理され，評価についても，指導と評価の一体化を目指し，「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点に整理されました。新しい教科書はどれも，この考え方にそって編集されています。

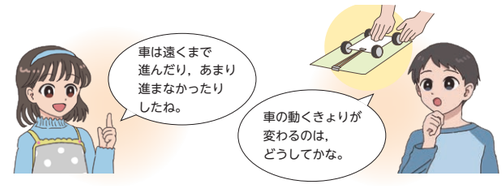
「主体的・対話的で深い学び」の視点から，「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」を重視した指導が求められ，教科書も，①見通しをもち，粘り強く取り組む／自分の学びを振り返り，次の学びに生かす（主体的な学び）②他者との協働や対話等を通じ，考えを広げ深める（対話的な学び）③各教科等の「見方・考え方」を働かせながら，深く理解したり考えを形成したりする（深い学び）ことができるよう工夫されています。また，カリキュラム・マネジメントを重視する観点から，他教科との連携が図れるような工夫もなされています。

● 新教科書の工夫

上記の新学習指導要領の考え方に基づいて，新教科書が編集されています。表現の工夫の仕方は発行者や教科によってさまざまですが，主な特徴は次の通りです。

○「主体的・対話的で深い学び」

児童が自分の考えをもとに，記述したり話し合ったりすることで深い学びにつながるように，対話・討論場面やグループでの活動場面を盛り込んでいます。



対話の場面の例

○オリエンテーション紙面

学習の進め方，教科書の使い方などの巻頭のオリエンテーション紙面が充実しています。

○二次元コード等

新教科書には二次元コード等を掲載できるようになりました。二次元コード等から学習に役立つさまざまなデジタルコンテンツを参照できます。

○その他

このほかに新学習指導要領では，小学校5，6年から英語が正式な教科となり，算数や理科ではプログラミング教育が導入されました。英語では二次元コード等のデジタルコンテンツが充実しています。プログラミング教育ではアンプラグド（PC，タブレット等を使わない）での学習も工夫されています。

● 効果的な教科書の使い方

学習指導要領にある三つの柱と「主体的・対話的で深い学び」を実現するために教科書をどう使っていけばいいのか。新しい教科書では，様々な先生方に効果的に使っていただくために様々な工夫がされています。また，教科書の性格は，教科によって大きく異なります。国語のように教材集といった性格の教科書から，社会科のように問題解決過程を踏まえて学習が進められるように構成されたものまで様々です。教科書にほどこされた様々な工夫をおくみ取りいただき，また教科書の性格をご理解いただき，教科書を効果的に使っていただければと思います。

それぞれの教科の教科書の具体的な使い方については，この小冊子の各教科の部分に詳しく書かれています。ここでは，共通して大切なことを挙げておきます。

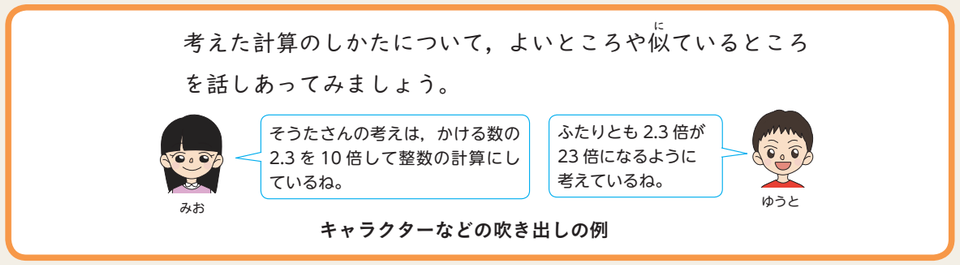
1．授業の準備

教科書には，授業を組み立てるための道筋が示してあります。授業の前に，教科書を充分に確認して，本時の目標や授業の進め方を構想することが大切です。その際，「教師用指導書」や「赤刷り」を参照することをおすすめします。授業を進める上でのポイントやヒントが書かれています。

2．授業中

授業中の教科書の使い方は，事前に検討しておくことが大切です。国語や道徳などは，教科書を中心に授業を進める方が効果的ですが，算数や理科では，場面によって教科書は閉じておいた方が効果的な場合もあります。

「対話的」な観点で言えば，子どもたちの発言がまとを射ていないと感じるときには，教科書にもどって，キャラクターなどの吹き出しを利用して，子どもたちの発言を本時の目標に導くようにすることも有効です。



キャラクターなどの吹き出しの例

3．まとめ

教科書には，まとめや振り返りのページがあります。これらのページを活用して学習活動を展開することが大切です。

特に，授業で教科書を開かせなかった場合などは，子どもたちが本時の学びを振り返ることができるように，授業の終わりに本時の学習内容が教科書のどの部分にあたるか伝えることが大切です。

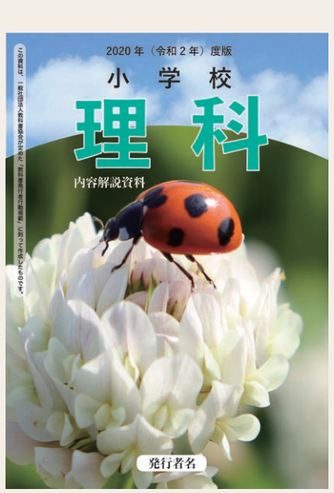
また，教科書には発展的な学習内容が用意されています。児童の習熟度等に応じて補充の問題などを利用することで，学習の広がりや深まりが期待できます。

● 教科書編集の工夫 ～教科書作成の意図～

検定教科書は，民間の発行者（教科書出版社）により，基本的に4年周期で改訂されています。発行者は学習指導要領の趣旨を踏まえ，その時代の教育にふさわしい独自の創意工夫を教科書にふんだんに盛り込んでいます。

小学校の授業は，令和3（2021）年度まで基本的に全ての教科を担任が担当する学級担任制でした。令和4（2022）年度から高学年では一部教科担任制が導入されました。

このような状況の中，小学校教科書は，その教科が専門でない教師，新任の教師，ベテランの教師など，さまざまな教師にとってできるだけ指導しやすく，また，児童が学びやすいように表現を工夫して編集されています。具体的な編集のポイントは発行者によって多種多様です。教科書がどのような意図で編集されているのか，詳しくは教師用指導書や，発行者のホームページに掲載されている「内容解説資料」を参考にしてください。学校現場の先生方に，教科書の編集意図を踏まえて指導実践していただくことによって，教科書の有用性がさらにいっそう高まっていくことと思われます。



内容解説資料

● 指導者用デジタル教科書，学習者用デジタル教科書

デジタル教科書は，大きく分けて指導者用デジタル教科書と学習者用デジタル教科書に分かれます。指導者用デジタル教科書は既に多くの先生方が利用されていますし，学習者用デジタル教科書も一人一台端末の普及に伴い急速に普及していくと思われます。紙の教科書とデジタル教科書を上手に組み合わせて，子どもたちにとって，わかりやすい魅力的な授業を実現していただければと思います。

国語の教科書の使い方

国語の教科書は，領域や言語文化など，学習内容によって紙面の様子が異なります。主な学習内容から，それぞれの紙面の性質に応じた教科書の効果的な活用方法を紹介します。

国語科の教科書は，毎時の学習内容の指標となる計画書というより，単元のまとまりをもった教材集と言えます。それは国語科の学習が，母語を対象とした学びであり，日常的に言葉を使う子どもたちの実態抜きには，計画し得ないからです。

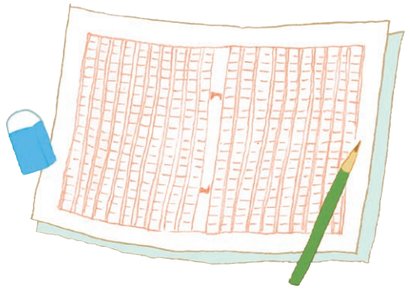
教科書が確定的な学習計画を提示していないからこそ，授業が言葉の学びとなるよう，毎時の目標や活動を教師が把握しておくことが不可欠です。それは，子どもたちが，①どのような活動を通して，②何に気づき，③何を学ぶのか，ということです。教科書は，いずれの段階でも最も効率的なツールと言えます。

だからこそ，単元全体を扉ページから最後まで確認する必要があります。子どもたちに身に付けさせたい力を明確にし，教師が教科書を基に単元を構築していくことになります。同時に，評価規準を設定し，何をどのタイミングで評価するのか，評価に関する計画を事前に検討しておきましょう。

また，子どもたちが学習に対して主体的に取り組むためには，子どもたち自身が学習に対する意識を高めることが重要です。教科書は，課題をつかんだり，学習を振り返ったりすることを促すために用いることもできます。単元の冒頭や終末はもちろんのこと，学習が進むに応じてその機会をつくるとよいでしょう。

学習の見通し → **振り返り**

- 見通しをもって学習活動を進めているか。
- 友達との対話によって学びを深めようとしているか。
- 学習によって，どんな言葉の力が身につくのか。



1．話すこと・聞くこと，及び，書くこと

学習活動の例示がそのまま学習内容になっています。教科書を確認することで，子どもたち自身が学習活動を捉え，見通しをもちながら学習を進めることができます。話し合い内での発話のやり取りや，作文例といった想定を共有することで，学習のゴールイメージを明確になります。

ただし，教科書が設定する話題や活動対象，状況は例示であるため，子どもたちや学校，地域の実態に応じて修正する必要があります。むしろ，教科書の例示を基に，子どもたち自身が相手や話題，形式を検討することで，明確な相手意識・目的意識をもつことができるでしょう。

2．読むこと

文学的な文章，説明的な文章にかかわらず，読むことの学習における紙面の大半は教材の提示です。だからこそ読むことの学習では，『教師用指導書』等を活用した教材研究が必要です。学習活動や学び方への理解に必要な情報が，手引きページに集約されています。手引きページの情報を基に，教材の特性をつかむことも教材研究の第一歩となるでしょう。

また，この紙面を教師と子どもたちが共有できる貴重な情報として活用することが求められます。

3．言葉の特徴や使い方，言語文化

言葉の特徴や使い方にかかわる学習単元は，該当ページを読み進めることで学習活動が成立するような紙面構成になっている場合があります。学習内容がはっきり示されている反面，表面上の理解にとどまってしまうことも危惧されます。他の教科の学習や子どもたちの生活と関連づけながら言葉が使われる場面を想起させ，学習内容の定着を図りたいところです。

俳句や短歌のような言語文化の学習単元は，教材の提示のみの紙面になる場合があります。学習活動の例示や学習内容が明示されていない分，学習展開は教師の裁量に大きく委ねられていると言えるでしょう。

4．情報端末との接続

教科書紙面にあるデジタルコンテンツへのリンクは，各教科書が用意するデジタルコンテンツに接続するものです。タブレット端末を使用して子どもたちが手元で確認することになります。例えば，話し合いの学習単元に埋め込まれた実際の話し合い，俳句や短歌の学習単元に埋め込まれた朗読のような音声コンテンツは非常に有効なものです。

第４学年「ごんぎつね」

１．授業の準備

（１）単元の目標と言語活動を確認しましょう。

手引きページには，リード文として，単元の目標が示されています。これは，教材を通して指導しやすい指導内容となっています。

「ごんぎつね」では，人物の気持ちの変化，人物の関係，情景といった内容が扱われる可能性があります。全てを網羅した学習を計画するのか，いずれかの内容に焦点化するのか，子どもたちの実態に応じた単元の目標の設定が求められます。その際，モデル紙面の「ポイント」のような，教材の特性に応じて示されている学習用語や読解方略を学ぶ機会も確保する必要があります。

また，例示された言語活動についても，単元の目標を達成する効果的なものとなるように，工夫する必要があります。

（２）毎時の問いを見通しましょう。

手引きページに例示された毎時の問い（学習課題）は，子どもたちに提示できる形に検討しましょう。

②「「ごん」の気持ちを想像しよう。」は，具体的にどのような場面・行動・会話を扱うのか，考えるために必要な叙述はなにか，といった点で工夫の余地があります。目標に向かって，子どもたちが考えやすい問い方を用意しましょう。

（３）作品に対する子どもたちの解釈を想定しましょう。

教材研究によって，作品理解の要となる内容を整理し，授業によって形成される子どもたちの解釈の幅を想定します。

「ごん」がつぐないを行う理由や「兵十」への想いは，ひとりぼっちという「ごん」の境遇が大きくかかわります。手引きページに例示された個々の問いは，場面の部分的なものにとどまることもあります。だからこそ，最終的には，子どもたちの解釈が，作品全体の中で一貫性をもったものになるように，積み重ねられる解釈の関連性を意識した学習計画が求められます。

２．授業中

○本時の問いにかかわる叙述と子どもたちの発言を関連づけましょう。

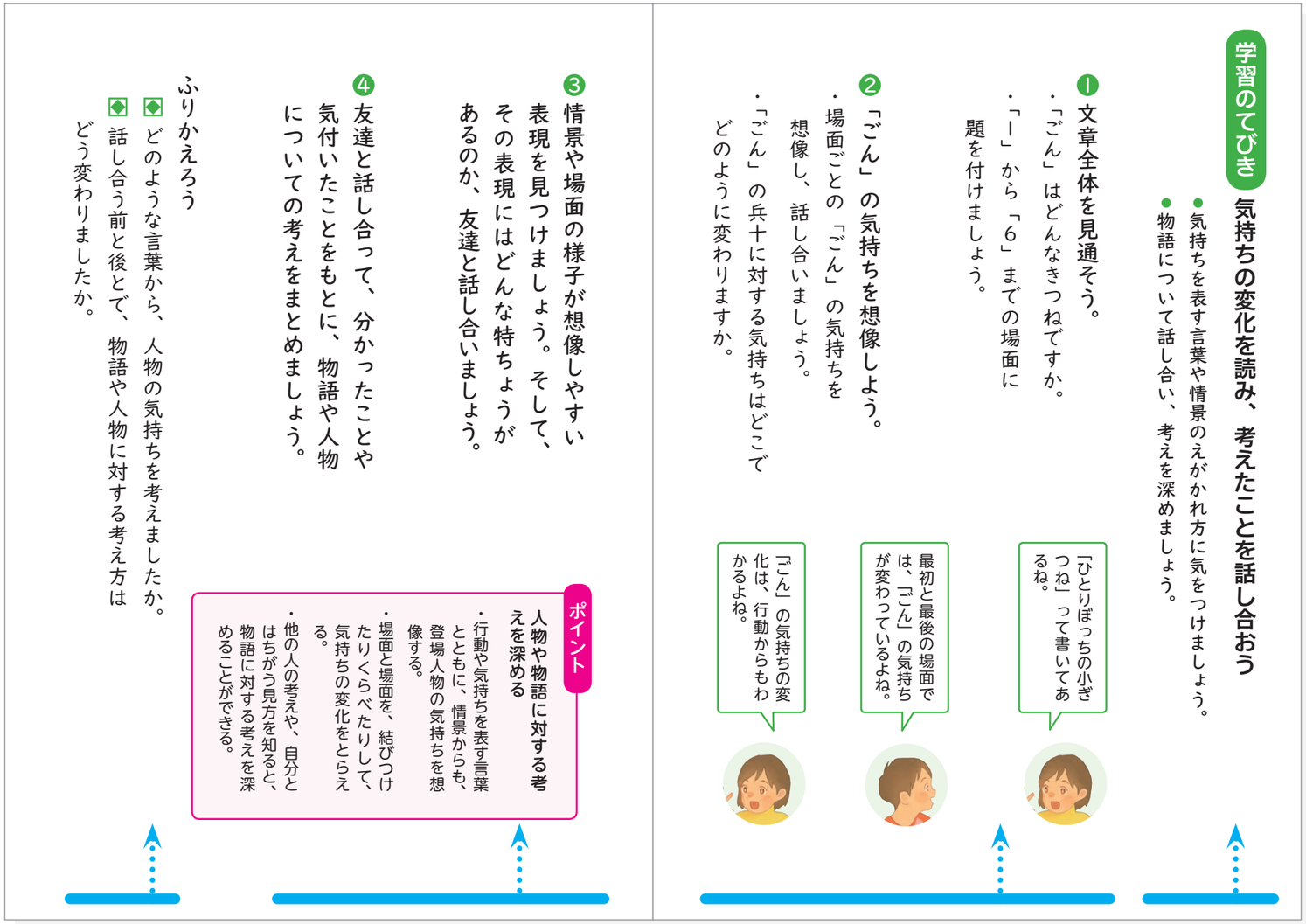
読みの学習は，叙述を基にした検討が大前提になります。しかし，単に問いに対する子どもたちの考えの根拠となる叙述を示せばよいわけではありません。

②「「ごん」の兵十に対する気持ちはどこでどのようにかわりましたか。」に対して，「ちょっ，あんないたずらをしなけりゃよかった。」という叙述を挙げ，いたずらを後悔していたと発言する子どもがいます。教師は，このような単純な結び付きに，他の子どもの発言や叙述を組み込み，板書を使って叙述の関連を表す役割を担っています。前後の叙述の関連はもちろんのこと，場面を越えた内容を結び付けることによって作品全体の内容理解の機会をつくることができます。

このような内容の読み取りに際して，読み方を明示的に扱うことが重要です。会話と行動から想像される人物の心情，視点人物の心情があらわれる情景描写，設定部・終末部から考える作品構造といったものです。

３．まとめ

毎時のまとめは，子どもたちの問いに対する考えが，話し合いや全体共有といった問いの検討を経て，再考されたものになります。教師は，ここでの再考した子どもたちの考えに対して，本時のねらいに沿ったものになっているのか，評価する必要があります。



書くこと

第４学年　考えたことを文章に書こう

１．授業の準備

（１）単元の目標を確認しましょう。

書くことの学習は，取材・選材，構成，記述，推敲，共有という一般的な文章作成過程を経ることになります。これは，学習指導要領の指導事項の枠組みとも言えます。つまり，学年や学習内容にかかわらず，いつも同じような学習活動になってしまう可能性が高いということになります。そして，教科書紙面も同様の指摘ができます。

ここでは，「◆**組み立てを考えて**」という構成に重点をおいた学習展開が想定されていますが，「◆**くわしく調べて，整理しよう**」といった選材の段階にもモデル紙面ではふれています。当然，このようなページの前には，テーマの設定や取材にかかわる紙面もあります。

だからこそ，単元では書く過程のどこにかかわる学習内容が重点となるのか，判断しておく必要があります。

（２）単元の活動を見通しましょう。

学習活動によって作られる文章は，どのような文種であっても，相手意識・目的意識が重要になります。

モデル紙面には「友達に」とあり，最も身近な読み手を設定しています。読み手を学級内に設定する場合は，最も効率的に文章をやりとりすることができます。ただし，他の学級や学年，保護者や地域の方と，読み手を学級外へ求めれば，書き手の意欲を高める効果もあります。

また，なんのために書くのか，という目的は文章内容そのものに影響し，「分かりやすく伝わるように」という目標を具体的にするものになります。

（３）想定文を設定しましょう。

この単元で，子どもたちはどのような文章を書くのか。当然，教師はこれを想定した文章を事前に作成しておく必要があります。想定文は，学習計画の妥当性を示すものであり，単元の評価にも直結するでしょう。

教科書紙面には，モデル文が示されています。これを想定文とすることも考えられますが，多くの場合，子どもたちの実態あるいは学習展開に合わないものとなります。その理由は，先述したように相手意識・目的意識は各学級で設定されるからです。

◆表をもとに文章を書こう。

エアバックランドセル

西田　あきと

登下校中の小学生が事こにあうというニュースを聞くことがあります。なくなってしまう子どももいて、とても悲しいことだと思います。運転手が安全に運転するのは、あたりまえのことですが、子どもたちを守るものがほしいと思いました。

そこで、ぼくは、エアバックがついたランドセルを考えました。

このランドセルには、車についているようなエアバックがついています。ランドセルに強い力がくわわると、自動でふくろがふくらみ、子どもの体を守るのです。登下校の時、もしも、車がぶつかってくるようなことがあっても、せおっているランドセルが大きなケガから子どもを守ってくれます。

このように、エアバックランドセルがあれば、子どもたちが安全に通学することができると思います。

おわり　まとめ　「はじめ」に答える

中　自分の考え説明　どう便利になるのか

はじめ　問題提起　考えた理由

◆くわしく調べて、整理しよう。

- 考えたことについてくわしく調べ、分かったことを書きだします。
- 友達に分かりやすく伝わるように、書くことを選びましょう。

◆組み立てを考えて、表にまとめよう。

〈組み立て表〉

はじめ	中	おわり
よくしたいと思ったところ	便利になるところ	まとめ
・小学生が登下校中、安全に通学できるようにしたい。 ・いつももっているものをいかしたい。 ・子どもの体を守りたい。	・車がぶつかってきた時、自動で働く。 ・ランドセルから袋が出てきて体を守る。	・エアバックランドセルがあれば、安全に通学できる。

２．授業中

○全体で共有できる学習場面をつくりましょう。

書くことは，個人的な作業です。これは教室内でも変わりませんが，書くことの学習を個人的なもので終わらせてはなりません。

そのために，情報の整理の方法や構成のイメージとなる教科書に示されている図表を活かすことができます。これらの図表は，書くことの過程にある活動例ですが，それ以上に共有の教材となります。

「組み立て表」は，初め・中・終わりに書く内容を整理したものです。これは，子どもたちが同様の活動の見本となる側面と基本的な構成の形を確認する側面，そして，書く内容の適否を考える側面をもっています。

授業では，組み立て表に列挙された内容とされなかった内容を取り上げ，「分かりやすく伝わるように」という観点から検討する機会をつくります。その後，自分自身の選材した内容を確認しながら，組み立て表を作成していきます。例示された教材があるからこそ，構成にかかわる課題が共有され，自身の組み立て表の作成について子どもたち同士で助言し合う状況が生まれます。

３．まとめ

文章を書くことは，言語活動のゴールになります。設定された読み手に応じて清書することもありますが，重要なことは体裁を整えることではありません。ここでの子どもたちには，改めて目的に沿った文章になっているか，推敲する姿勢が求められます。

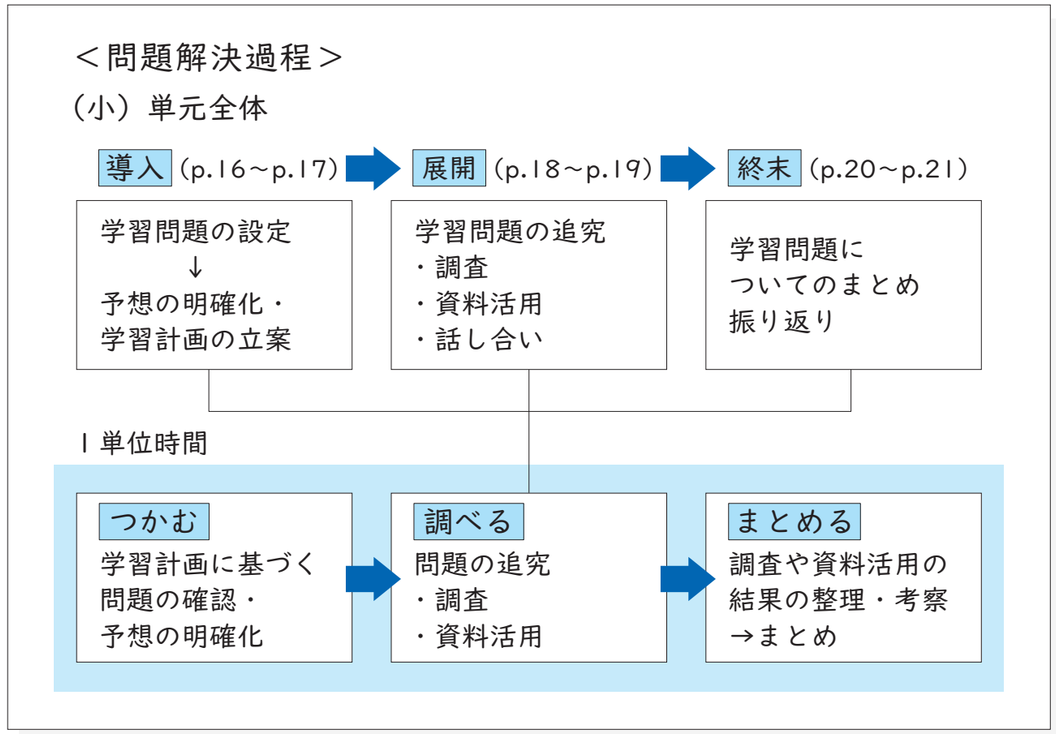
また，目的とする文章が書きあがった後には，個々の内容的な面白さだけではなく，学んだことが文章に表れているか，確認する機会が必要です。教科書のモデル文や組み立て表を，自身のものと比較することで，文章の形式にかかわる学習を振り返ることができるでしょう。文章の内容と形式は，いずれも学習の成果として扱うべきものです。

社会の教科書の使い方

1．「問題解決過程」を意識しましょう－教科書の全体の構成

社会科は，「問題解決過程」を踏まえて学習が進められています。

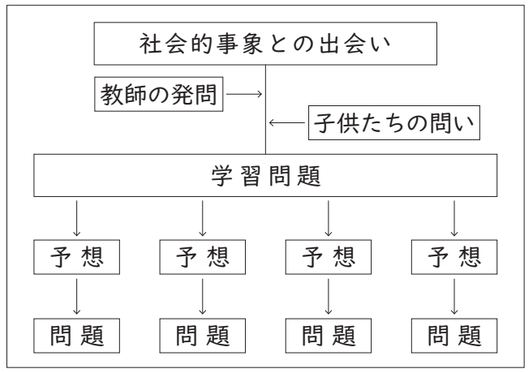
「問題解決過程」とは，（1）（小）単元（学習のまとまり）が「導入」→「展開」→「終末」というプロセスを踏まえて進められること，と，（2）１単位時間が「つかむ」→「調べる」→「まとめる」というプロセスを踏まえて進められることです。換言すれば，導入時につかんだ「学習問題」（これを解決すると得られる（小）単元の解答に到達する，という問い）を調べ，まとめていくことになります。教科書は，以下のように構成されています。



2．教科書を活用する上で特にポイントとなるところ

（1）学習問題をつかみ，予想を立てるためのポイント（p.16～p.17）

導入時に，子供たちが教科書の資料を活用したり話し合ったりしながら，教師の発問によって，あるいは子供たちがもった問いを生かし，学習問題を明らかにします。子供の問いは教師が想定したよりも広がりすぎる場合もありますので，１単位時間のねらいを確認したり，資料を読み取る際に見方・考え方を示したりすること（例：3）がポイントになります。また，教科書に示された子供の発言も活用できます（例：2）。



学習問題ができたら，子供たちが予想をする活動を組み入れます（例：7）。問題解決過程を踏まえた学習の特色の一つは，「学習問題に対する予想」を「追究する（調べる）」ことであるからです。このことは，「学習計画」に示されている場合があります。また，予想がいくつかにまとめられて「展開」の段階に位置付けられる「１単位時間の問題」になることがあります（例：7，9）。

以上のことが教科書に盛り込まれていることを捉えておきましょう。

（2）資料を活用させるためのポイント（例：p.18～p.19）

社会科の教科書は，多くの場合１単位時間で２P（１見開き）を扱うようになっています。ここには，複数の資料が掲載されています（例：1，5，6，7，8）。先生方の中には「全てを扱うことが不可欠」と考えて子供たちに調べさせたり先生が解説したりすることがあります。しかし，必ずしも全てを扱う必要はありません。

教材研究をする際に，資料一つ一つを分析し，それぞれがどのように活用できるかを明らかにした上で，

ア　全てを活用するか，どれを活用するかを決める

イ　活用する順序を決める

ウ　資料の読み取り方を明らかにする（社会的事象の見方・考え方の働かせ方）

などを明らかにします。

特に，ウについては資料の効果的な活用の仕方として示されている場合があります。「何をどのように読み取るのか」を確認していくとよいでしょう（例：3）。

（3）「本文」を活用させるためのポイント

先生方の中には，「教科書の本文は学習問題の答え」と考える場合があり，本文をあえて読ませないことがあります。しかし，教科書の本文には

ア　子供たちが考えるための例（p.19 の10）

イ　調べる活動のヒント（p.18 の4）

ウ　多様な見方や考え方をするための手立て（p.18 の4）

などが示されており，学習活動を一層充実させるための一助になります。（2）の資料と併せて効果的な活用ができるようになっています。

（4）深い学びに向けた「終末（まとめる）」のポイント（p.20～p.21）

特に，「終末」の段階で，展開の段階での調べたことをまとめる，換言すれば，学習問題に対する解答をしていく活動はとても難しい，と言われています。この点について，教科書は，それまでの学習を振り返りながら，調べたことを比べて共通点を見出させたり，関連させたりまとめたりする活動を促す記述をしています（例：2，4）。また，板書やノートなどの作品を例示しながら，子供たちに考える手立てを示しています（例：3）。子供たちの発言は，互いを認めたり，意見を付け足したりするようにもなっています。これらを有効に活用しながら子供たちが学習活動を展開できるようにします。

（5）社会的事象の見方・考え方を働かせるポイント（p.21 の9）

子供たちが，社会的事象の意味や意義，特色や相互の関連を考察するなどの際の「見方」や「考え方」を働かせる大切さが指摘されています。教科書には，キャラクターの吹き出しなどで「見方」や「考え方」を示し，子供たちが考えやすいようにする工夫があります。

第４学年「水はどこから」を例に

導入部分の活用のしかた

※ ★数字は，内容を活用していく順番(指導の流れ)の例を示しています。

1 写真の活用

ここでは，子供たちの生活場面を取り上げながら，「水道がどこにつながっているのか」を予想させるためのきっかけとして活用します。

学校の中で，自分たちが水を使っている場面を確認し，日々の生活に欠かせないものであることに気づかせることが大切です。

2 「わたしたちの使う水はどこから」本文の活用

特に「つかむ」段階での本文は，学習問題につながる表現が出てきます。

例えば，「水道管ものびていた」「学校の水は，森やダム，川を通って，浄水場から来ているよ」などです。子供たちが考えづらかったり，考えを確認したりする際，効果的に活用できます。

また，どの資料と子供たちの発言がつながっているかも，確認することで，根拠を示しながら考えることの大切さを示すことができます。

3 イラスト資料の活用

これは，資料①・②を読み取った後，めあてにある「どこから」に着目させるために活用します。

4 つかむの活用

(本時のめあての確認)

この１単位時間の学習のめあてを確認し，子供たちに見通しをもたせます。

5 まなびのポイントの活用

子供たちの学習の方向性を明確にするために活用します。ここでは，資料３の後に活用するとよいでしょう。

7 学習問題について予想しようの活用

「学習計画を立てよう」にある「調べること」を明らかにするために，特に資料④を活用しながら予想を明らかにします。

関連づけて活用

8 イラスト資料の活用

ここでは，学習問題の予想をするために活用します。「ダム」「浄水場」「市街地」といった言葉を大切にしながら，「通り道」を明らかにするとともに，「どのように送られてくるのか」を予想させます。

9 調べることの活用

予想を基にして，「何を調べる」のかを明らかにします。

10 調べ方の活用

今までの学習経験も生かしながら，調べる方法を確認していきます。

キャラクターの活用

キャラクターの発言についている記号に着目して子供たちにも考えさせてみましょう。

「！」… 気づいたこと
「？」… 疑問
「≒」… 予想 など

関連づけて活用

6 学習問題を立てること

小単元で何を調べるのかを明らかにします。資料１～３や本文，また「まなびのポイント」を踏まえながらここにつなげていきます。

11 まとめ方の活用

様々なまとめ方がありますが，例えば教科書にある作品を紹介しながらイメージをもたせることも効果的です。

展開部分の活用のしかた

※★数字は，内容を活用していく順番(指導の流れ)の例を示しています。

1 地図の活用

まず，地図記号を確認し，どのようなところが「何」に利用されている土地にあるのかを確認させましょう。

2 調べるの活用

１単位時間の学習の始めに，「ねらい」を確認するために活用します。

「どのようなところ」を具体的に説明するには，「何」がわかればよいのかを，本文も読みながら確認しましょう。(まずは，地形と気候です。)

3 学び方・調べ方の活用

（土地利用図の読み取り方）

地図の活用は社会科では特に重要な技能の一つです。学習経験があまりない，と考えられる段階なので，このコーナーを活用しながら右の土地利用図を読み取っていきます。子供たち全員と共に活動していきながら，確実に技能を伸ばしていくとよいでしょう。

※まとめの際に「まなびのポイント」とつなげて指導すると効果的です。

4 本文の活用

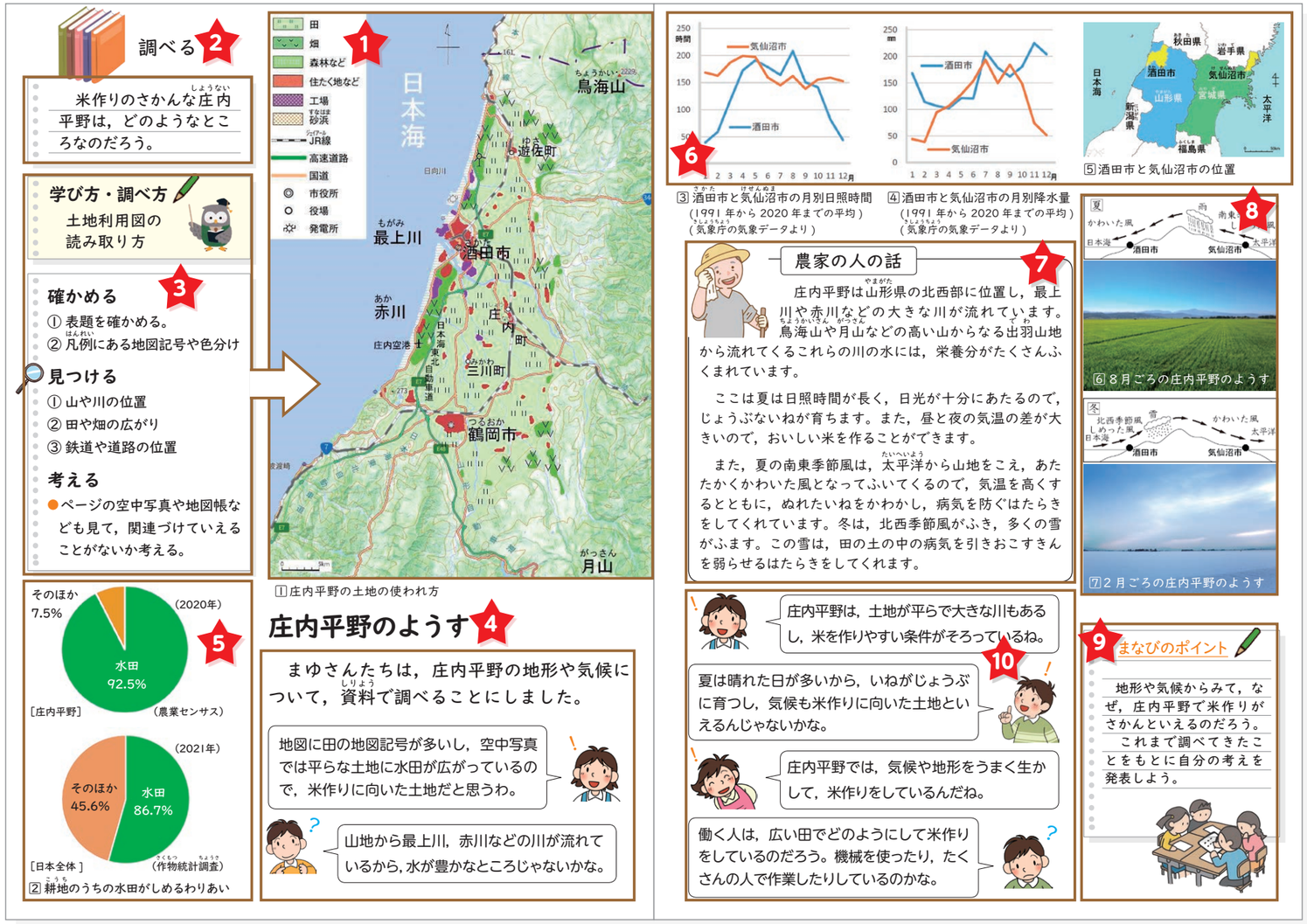
1の「ねらい」を確認する際に，本文のキーワードを確認することで，「何」がわかれば，米作りがさかんな理由を具体的に説明できるかを考えさせましょう。

5 グラフの活用

ここでは，耕地面積の内訳を調べます。

「全国」と「庄内平野」の割合を調べるとともに，全国と「比べて」庄内平野はどうだろう，と問いながら，庄内平野の土地利用の特色を明らかにします。

「比べる」は社会科では，とても重要な考え方です。



6 グラフ等の活用

（グラフの読み取り方）

※本文と対応を確認しましょう。

ここでは，資料3を4と丁寧に読み取りながら，酒田市（庄内平野）の日照時間，平均気温の特色を確認します。さらに，比較対象である気仙沼市とは「緯度」があまり変わらないところから，庄内平野の自然条件の特色を明らかにします。

複数の資料を「関連付け」ていくことも社会科の考え方の大切な点です。

7 本文の活用

これは，子供たちが土地利用図や統計資料などから読み取ったことを確認しています。

ここだけ読めば本時の内容が分かってしまう，という疑問もありますが，学習の終末に活用し，読み取ったことを確実に押さえていけば，とても有効です。

つなげる

8 図と写真の活用

農家の人の話をイメージ化した「風向きと降水の図」「夏・冬の水田の写真」です。

話の内容と図を照らし合わせたり，図や写真から何がわかるかを発表させ，気候との関係をイメージ化させてみましょう。

9 まなびのポイント

（社会的事象の見方・考え方）

ここでは，どのような観点をもって考えたらよいか，を示してあります。

「地形」「気候」といった自然環境に着目することを確認すると子供たちが適切に考えやすくなります。

関連づけ

10 本文の活用

ここは，子供たちの振り返りになっています。本時の「まとめ」の際に参考にできます。

確認する内容は「何か」をチェックしたり，(ここでは，気候や土地などの自然環境)残された課題は何かを確認したりすることが大切です。

第３学年「事故や事件からまちを守る」を例に

終末（まとめる）部分の活用のしかた

※ 数字は，内容を活用していく順番(指導の流れ)の例を示しています。

1 まとめるの活用
（学習問題の確認）

「まとめる」段階では，学習問題に対して子供たちが考えを明らかにする，という活動を行います。改めて学習問題を確認することが重要です。

キーワードの活用

子供たちが学習問題に対するまとめを行う際に，大切にしたいことばです。これを用いると子供たちは考えやすくなります。

2 本文の活用

「学級全体」で「調べたことを振り返り」ながら「発表する」，「対話的な学び」の一例として考えてみましょう。

まとめる際に「このように作ってみるよ」と例示したり，まとめの活動の途中で，「振り返りで足りない部分はないかな」と確認したりと活用を工夫してみましょう。

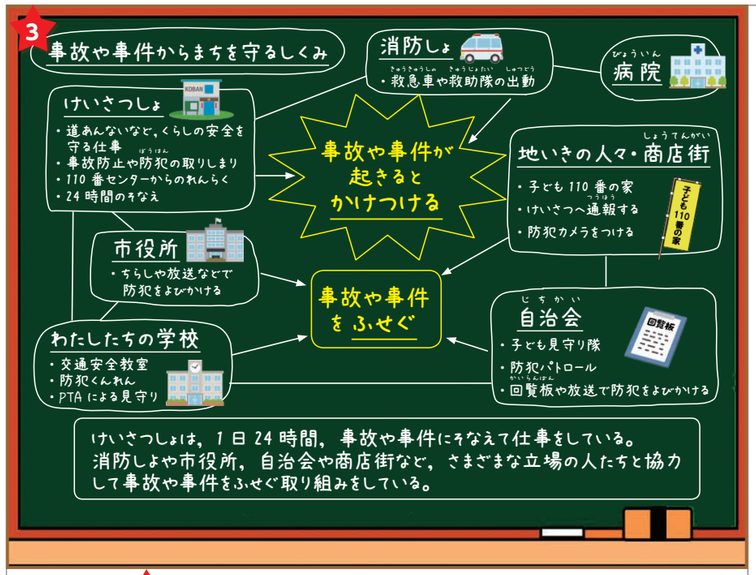
3 本時のめあての確認
（板書コーナーの活用）

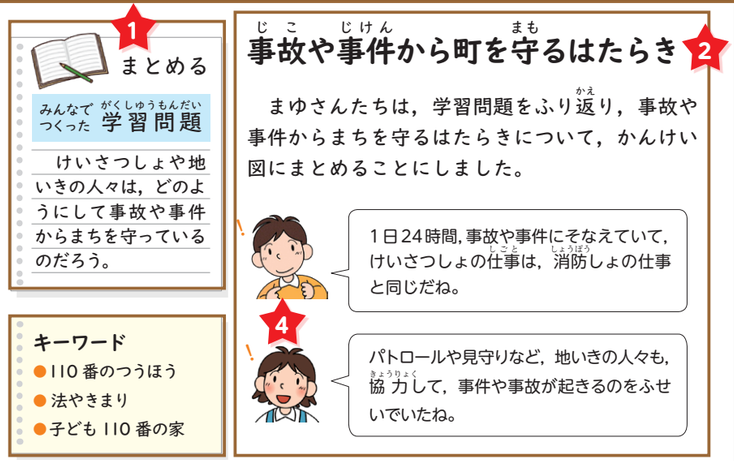
これは，板書の一例です。ここに示された内容は，今まで調べてきたことを示しています。

一つ一つの内容を確認するとともに，つながりや関係を考えるように促していきます。

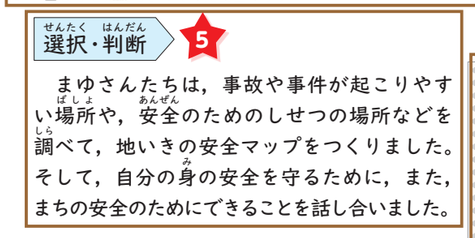
3 板書コーナーの活用

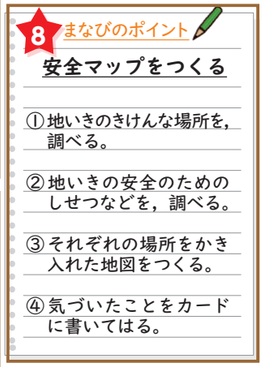
一つ一つの内容を確認していくと，下の囲み（結論）に至るようになっています。





↑1 まゆさんたちがつくった安全マップ





4 キャラクターの発言の活用

まとめは学習の振り返りです。何に視点を当てて振り返るとまとめになるか，キャラクターの発言を活用して子供たちに重要ポイントを再確認させながら，まとめにつなげていきましょう。

けいさつしょは，1日24時間，事故や事件にそなえて仕事をしている。
消防しょや市役所，自治会や商店街など，さまざまな立場の人たちと協力して事故や事件をふせぐ取り組みをしている。

※まとめとしての「安全マップ」作成のポイント

5 選択・判断「本文」
↑
つなげる
↓
8 まなびのポイントの活用

5 選択・判断「本文」

安全マップを作成するだけでなく，これを基に，自分ができることや気を付けたいことを振り返る手助けとします。

6 キャラクターの発言の活用

示された安全マップは，「別の地域の例」ということを強調して，キャラクターの発言から，安全確認する際のキーワードを再確認し，改めて子供たちが生活する地域の「安全確認」を継続する意識を育ててみましょう。

7 「安全マップ」の活用

今までの学習を踏まえながら，子供たちがよりよい生活をするために実行できそうなことや提案できそうなことをすることを明らかにする場合があります。

「安全マップ」を作成しながら，改めて自分たちが，事故や事件から自分たちが気を付けるべきことを明らかにすることができます。

8 まなびのポイントの活用

安全マップが一層効果的な作品となるように，具体的な作成の仕方が示してあります。ガイドとして使います。

9 キャラクターの発言の活用

改めて、子供たちが生活する地域の「安全確認」を継続する意識を確認しましょう。

算数の教科書の使い方

算数の教科書は，授業中はもちろんのこと，教師の授業準備や，子どもの復習にも活用できます。教科書をよりよい授業づくりのためのツールとして活用する方法を紹介します。

1．授業の準備

（1）本時の目標を確認しましょう。

『教師用指導書』を読む前に，児童の立場に立って教科書の問題を実際に解いてみましょう。頭の中で解くのではなく，たとえば，教科書をコピーして実際に解き，その時に気付いたスモールステップや児童のつまずきも書き込んでおくと，より有効な準備になります。

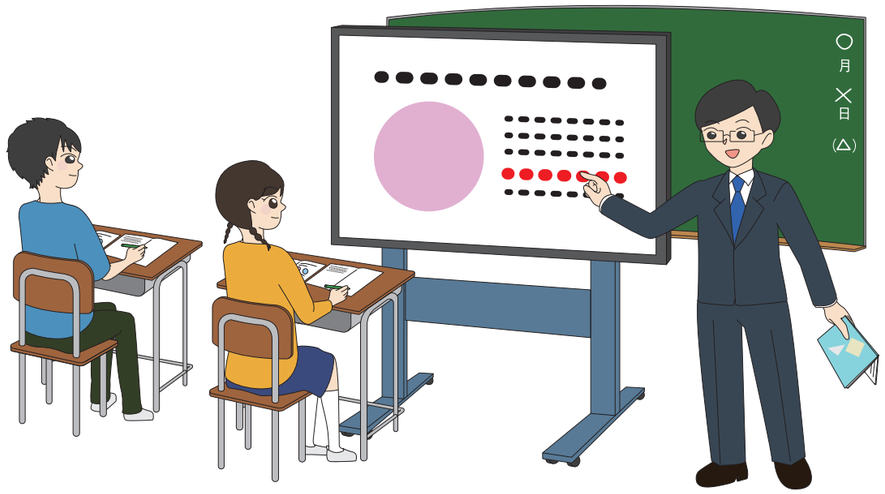
その上で，教師用指導書の本時の目標を確認しましょう。

（2）本時の本質となる数学的な見方や考え方を明らかにしましょう。

教科書の本文の意味や表現はもちろんのこと，キャラクターの吹き出しのセリフの意味を吟味したりすることが有効です。

（3）多くの子どもたちから本時の本質にせまる発言が出るよう，発問や学習活動を考えましょう。

子どもたちの実態に応じて，教具を用意したり，取り上げて比較する考えを決めたりすることは重要です。また，教科書には書かれていない，授業だからこそできる発問があります。たとえば，「○○さんはどうしてこう考えたかを考えてみましょう」，「この問の○○さんの考えと比べてみましょう」といった発問です。具体的に，教室で子どもがどう考えるかを想像したり，これまでの授業の場面を思い出したりしながら考えてみましょう。



（4）授業中の教科書の使い方を検討しましょう。

内容や児童の実態に応じて，教科書の使い方は様々です。例えば，次のような使い方が考えられます。

・問題提示の際は開かせ，個別解決中は閉じさせ，まとめで再度開かせる。
・常に開いて，自由に見てよいとする。
・何も指示をせず，それぞれの児童の判断に委ねる。

2．授業中

○本時の本質につながる発言を拾い集め，つなげましょう。

本時の目標の達成は，本時の本質を子どもたち自身が発言することです。本時の本質につながる児童の発言を拾い集めましょう。

子どもは，自分の感覚に合わせたさまざまな言葉で本時の本質を表現します。子どもの発言の意図を素早く教師が察知し，問い返していくことが大切です。一人の子どもの不正確な表現を教師が正確に言い直すのではなく，子どもたちの表現をつなげることで子どもたち自身が本時の本質へと近づいていく過程を大切にすると，本時の本質を子どもたちが口々に話し始める瞬間が訪れるでしょう。

3．授業後

授業後に，子どもたちが本時の学びを振り返ることができるように，授業の終わりに本時の学習内容が教科書のどの部分にあたるのかを子どもに伝えることが大切です。授業での学びと教科書の記述内容が結びつき，学びを深めてくれるでしょう。

次ページから「下学年」と「上学年」の例を紹介します。

第２学年　「かけ算１」２時間目　かけ算の意味と答えの求め方（累加）

１．授業の準備

（１）本時の目標を確認しましょう。

例えば，第２学年の単元「かけ算（１）」２時間目では，教師用指導書の目標は「基準量のいくつ分という見方を働かせて，かけ算の意味を理解し，式に表すことができる。」となっています。「基準量」とは何か，ここで学ばせたい「かけ算の意味」とは何かを明確にしましょう。

（２）本時の本質となる数学的な見方や考え方を明らかにしましょう。

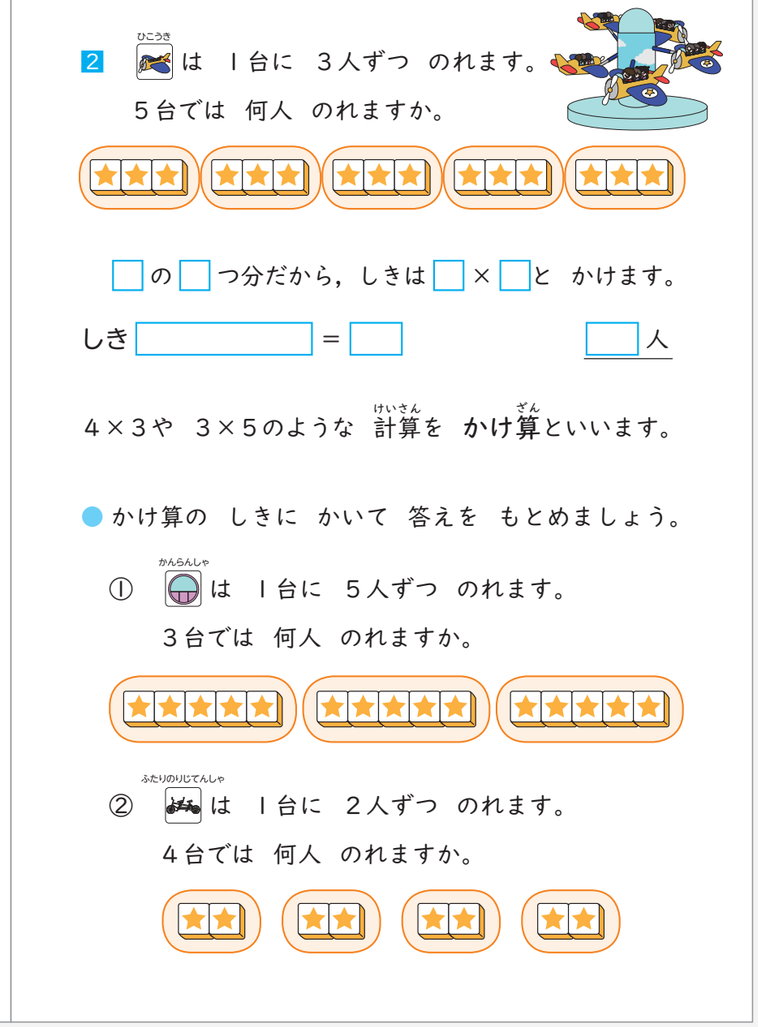
授業では，「のりものにのれる人の数をしらべましょう」という問題に対して，子どもが数学的な見方・考え方を働かせて，「かけ算の意味」を理解していくことが大切です。

本時の吹き出しでは，１つのまとまりの数（基準量）に着目したり，まとまりのいくつ分か（かけ算の意味）に着目したりしています。また乗り物に乗っている状況が，図とブロックと式をつなげながら何度も繰り返し表現されています。

つまり，まとまりの何個分という状況を目で見たり，ブロックで操作したりしながら，乗法の式表現につなげていくことが重視されていることが分かります。これらから，本時の本質は，「同じ数を加え続ける（同数累加）という状況は，乗法を用いて簡潔な式表現ができる」であることが分かります。

（３）多くの子どもたちから本時の本質にせまる発言が出るよう，発問や学習活動を考えましょう。

加法の特殊な状況である同数累加の状況を図で視覚的に，ブロックで操作的に，式で記号的に表現することで乗法の意味理解へ導こうとしている意図が読み取れます。つまり授業では，図のような状況を子どもたちが実際に体を動かして再現したり，一人一人の子どもがブロックで実際に操作活動をしたりして，式表現につなげることが大切なことが分かります。



しかし単に乗り物に乗れる人数を調べるのであれば，「何人乗っているかを１人ずつ数えればすぐわかるのに」と感じる子どもは少なくないでしょう。実際に，人数を調べるには，ブロックを１つずつ数えればすぐにわかります。このように感じている子どもにとって，乗法の概念はあまり魅力的には見えないでしょう。あらためて「本時の本質を学ぶと子どもにとってどんなよいことがあるのだろうか」と考えてみましょう。すると，５×９の場面を用意することが思いつきます。5+5+5+5+5+5+5+5+5 と表すよりも，５×９と表した方がとても簡潔なことに気づくからです。

このように，同数累加では手間のかかる場面を用意し，ブロックや加法で考える学習活動を経験すれば，「同じ数のまとまりが何個分かのときは，かけ算の方が楽に式が書けるね」という，本時の本質につながる言葉が学級のあちこちから聞こえてくるでしょう。

２．授業中

○本時の本質につながる発言を拾い集め，つなげましょう。

本時の本質につながる発言である，いくつ分，同じ数ずつ等の子どもの発言を拾い集めましょう。しかし子どもたちは，自分の感覚に合わせたさまざまな言葉で本時の本質を表現します。例えば，「同じもの」，「続いている」等の表現です。子どもの発言の意図を素早く教師が察知し，「同じまとまりってどういうこと？」，「同じものって何？」のように問い返していくことが大切です。

３．授業後

操作をさせたり，指導者用デジタル教科書で示したりしたときは，子どもがその考え方などをノートに記録できていないことがあります。授業の終わりに本時の学習内容が教科書のどの部分にあたるのかを子どもに伝えましょう。

第５学年「小数のかけ算」１・２時間目（整数）×（小数）の意味と計算方法

１．授業の準備

（１）本時の目標を確認しましょう。

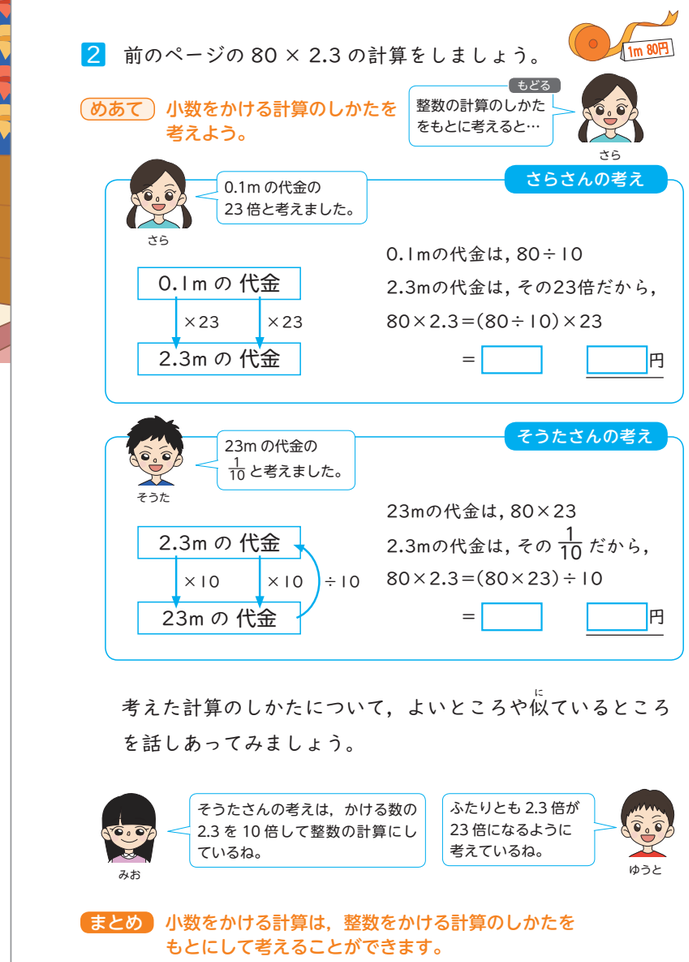
第５学年の単元「小数のかけ算」１・２時間目では，教師用指導書の目標は「(整数）×（帯小数）の場面を式に表し，乗法の意味について考え，理解することができる。」「(整数）×（帯小数）の計算の仕方を，整数の計算に帰着させて考え，理解することができる。」となっています。教科書では，問題ではなく「めあて」にあたります。

めあて　80 × 2.3 の式になるわけを説明しよう

第１時の「めあて」は，「80 × 2.3 の式になるわけを説明しよう」であり，第２時の「めあて」は「小数をかける計算のしかたをかんがえよう」となります。子どもが数学的な見方・考え方を働かせて，「乗法の意味」や「計算方法」を考え，理解していくことが大切です。

（２）本時の本質となる数学的な見方や考え方を明らかにしましょう。

吹き出しでは，数直線図や関係図を基に立式したり，計算のしかたを考えたりしています。これらから，本時の本質は，「数直線図や関係図を用いて，（基準量）×（何個分）から（基準量）×（何倍）へと乗法の意味をとらえ直し，既習をいかして解決の道筋を考える」ことであると分かります。本単元で子どもが乗法の意味をしっかりととらえ直すことができれば，【単位量あたり】や【割合】の考え方の素地ができたことになります。



（３）多くの子どもたちから本時の本質にせまる発言が出るよう，発問や学習活動を考えましょう。

第２時の教科書では，「計算のしかたについて，よいところや似ているところを話し合ってみましょう。」という問いがあります。授業では，２mと 0.3m に分けて考える子どもがいるかもしれません。そのような考えも取り上げて，それも含めて話し合わせることも考えられます。

内容によっては，「いつでも使える方法はどれでしょう。」や「より簡単で正確な方法はどれでしょう。」等の発問も有効です。子どもたちから本時の本質にせまる発言が出るよう発問を考えましょう。

（第２時の吹き出し）

２．授業中

○本時の本質につながる発言を拾い集め，つなげましょう。

子どもたちは，自分の感覚に合わせたさまざまな言葉で本時の本質を表現します。例えば，「整数のときと同じように」等の表現です。児童の発言の意図を素早く教師が察知し，「整数のときと同じってどういうこと？」のように問い返していくことが大切です。

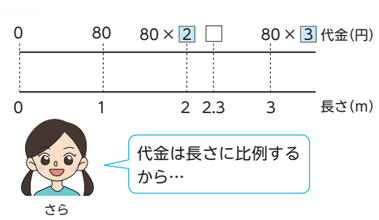
子どもの言葉で授業を創りながら「まとめ」に近づけていきましょう。

（第２時のまとめ）　まとめ　小数をかける計算は，整数をかける計算のしかたをもとにして考えることができます。

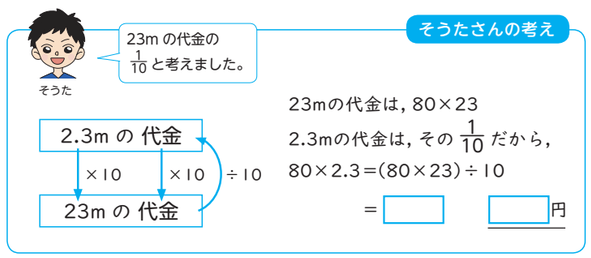
３．授業後

主体的・対話的に学び続けるためには，いろいろな考えを比べることで学びが深まることを実感させることも大切です。授業の終わりに，教科書にもいろいろな考え方が書かれていることを見せて，板書と対応させ，自分たちの学びと関係付けるとよいでしょう。

（第１時の吹き出し）



（第２時の吹き出し）



理科の教科書の使い方

小学校理科の教科書は一般的に，右の図のように，問題解決の過程に沿って構成されています。それぞれの教科書の構成（学習展開）をもとに授業を進めましょう。

1．授業の準備

（1）本時の目標を確認しましょう。

①教科書の単元全体を見たあと，本時のページを読んで，構成をつかみます。

②『教師用指導書』を読んで，単元全体の最終目標（資質・能力の育成）と本時の目標（問題解決の各過程の目標）を確認します。

③観察・実験などの活動がある場合は，必要なものを事前に準備します。

（2）「理科の見方・考え方」を確認しましょう。

教科書や教師用指導書を読んで，本時で扱うことが想定されている「理科の見方・考え方」を確認します。授業の中のどこで，見方・考え方を働かせる場面を設定するのが適切か，あらかじめ考えておきましょう。一般的には教師用指導書に指導例が示されています。

小学校の学習過程例
（問題解決の過程）

① 自然事象への気付き
↓
② 問題の設定
↓
③ 予想や仮説の設定
↓
④ 検証計画の立案
↓
⑤ 観察・実験
↓
⑥ 結果の処理
↓
⑦ 考 察
↓
⑧ 結論の導出

文部科学省HPより改変

注）中学校・高等学校では「探究の過程」として，上と同様の図に「見通し」「振り返り」が加わりますが，小学校では省略されています。

（3）授業に入る前に授業中の教科書の使い方を確認しましょう。

学習内容や児童の習熟度・適性によって，教科書の適切な使い方は多様であると思われます。例えば，次のような使い方が考えられます。

使い方（A：開いて使う，B：開かずに使う）	理 由
①事象提示や活動により問題発見する場面では，教科書は使用せず（B），問題を設定する場面で初めて使用する。（A）	・動植物のようすや物理・化学現象などに対して，実際に見たり感じたりしたことから気づいたことを話し合う方が興味・関心を高めることが多いと考えられます。
②観察・実験の方法を確認するときに使用する。（A）	・教科書と同じ方法で観察・実験をする場合は，手順や注意事項をしっかりと確かめることができます。
③結論を確認するときに使用する。（A）	・グループや学級でまとめた結論と教科書の結論を比べて，矛盾がないことを確かめることができます。
④コラム（読み物資料）などを読むときに使用する。（A）	・実際に読んで感想を話し合うときなどに使います。
⑤問題解決の各場面で，話し合いが活発になるように活用する。（B）	・教科書は開かずに，教師が教科書のキャラクターのセリフを言い換えるなどして，場面に応じて声をかけると，話し合いが活発になると思われます。

2．授業中

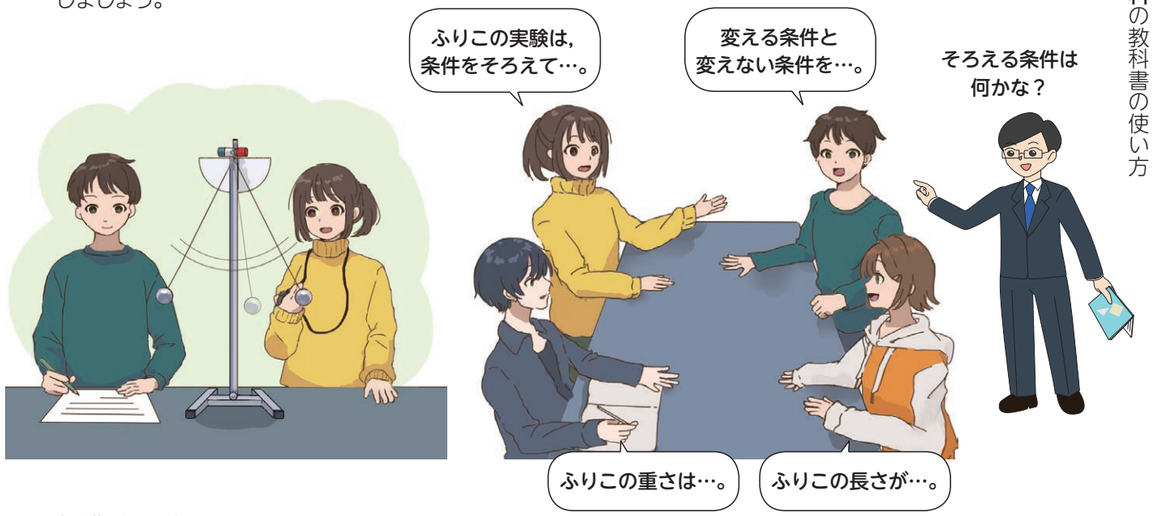
○本時の目標につながる行動・記録を集めて，整理していきましょう。

①児童は自ら目標につながる発言をしたり，行動・記録したりすることで本時の目標の達成に近づきます。これらの発言や行動・記録を集めて整理し，目標を達成しましょう。

②児童は自分の生活経験，既習内容，感性などによってさまざまな言葉で表現したり，行動・記録したりします。発言や行動･記録の意図を教師が素早く察知し，児童の考えを進めるために学級全体のコミュニケーションを活発にすることが大切です。ここでは主体的・対話的で深い学びを意識しましょう。

③発言や行動・記録で迷っている児童には，教科書のキャラクターの吹き出しのセリフを参考にするのも1つの方法です。セリフには教科書によって特徴があるので，場面に応じた効果的な声かけを工夫してみましょう。（p.33，p.35 を参考にしてください。）

④児童の発言や行動・記録を集めて整理していき，教師と児童（学級全体）とのコミュニケーションで目標達成に近づけていきます。そして最終的には児童自らが納得して目標達成（問題解決）を実感できるようにしましょう。



3．授業の最後に

○授業の最後に教科書紙面で確認しましょう。

授業の最後に，児童が本時の学びを振り返ることができるように，本時の学習内容が教科書のどの部分にあたるのかを児童に伝えることが大切です。授業での学びと教科書の記述内容が結びつき，確かな学びにつながります。

余裕があったら教科書に掲載されているコラム（読み物資料）などを読んだり，その内容について話し合ったりしてみましょう。そうすることで，学習内容への興味・関心を高めたり，理解を深めたりすることができ，深い学びにつながると思われます。

一般的な理科の教科書の紙面

小学校理科の教科書の紙面は，一般的に次のように構成されています。(p.31 ～p.34 の展開にしたがってイラストなどを添えました。)【　】内は p.28 の「小学校の学習過程例」との対応を示しています。教科書の問題解決の１つ１つが学習指導要領の各項目の目標を達成するための学習過程となっています。

１．問題を見つける【①自然事象への気付き】

学習への導入場面です。自然の事物・現象（動植物や地質・気象・天文のようす，物理・化学現象など）に対して，主に差異点や共通点を基に，問題（問題解決の過程の問題文）を見つける場面を設定しています。３年で特に重要な場面です。

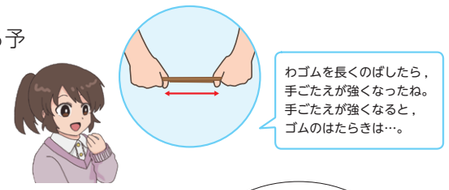
ゴムののばし方をかえると，ものの動き方はどのようにかわるだろうか。

２．問題【②問題の設定】

①の自然事象への気付きを基に，活動や話し合いを通して，問題を設定します。

３．予想【③予想や仮説の設定】

設定した問題について，生活経験や既習内容を基に，根拠のある予想や仮説を発想する場面です。４年で特に重要な場面です。



４．計画【④検証計画の立案】

自然の事物・現象から見いだした問題についての予想や仮説を基に，解決の方法（観察や実験の方法）を発想する場面です。５年で特に重要な場面です。

５．観察，または実験【⑤観察・実験】

発想した解決の方法にしたがって観察，または実験を行う場面です。教科書には手順やイラスト・写真などが示されています。器具の使い方や注意事項なども掲載されています。

６．結果【⑥結果の処理】

観察，または実験を行った結果の記録を整理する場面です。表やグラフ，写真やスケッチなどを用いてまとめます。

わゴムをのばす長さ		5 cm	10 cm
うごいたきょり	１回目	３ｍ　30 cm	６ｍ　50 cm
	２回目	３ｍ　40 cm	６ｍ　20 cm
	３回目	３ｍ　20 cm	６ｍ　40 cm

７．考察【⑦考察】

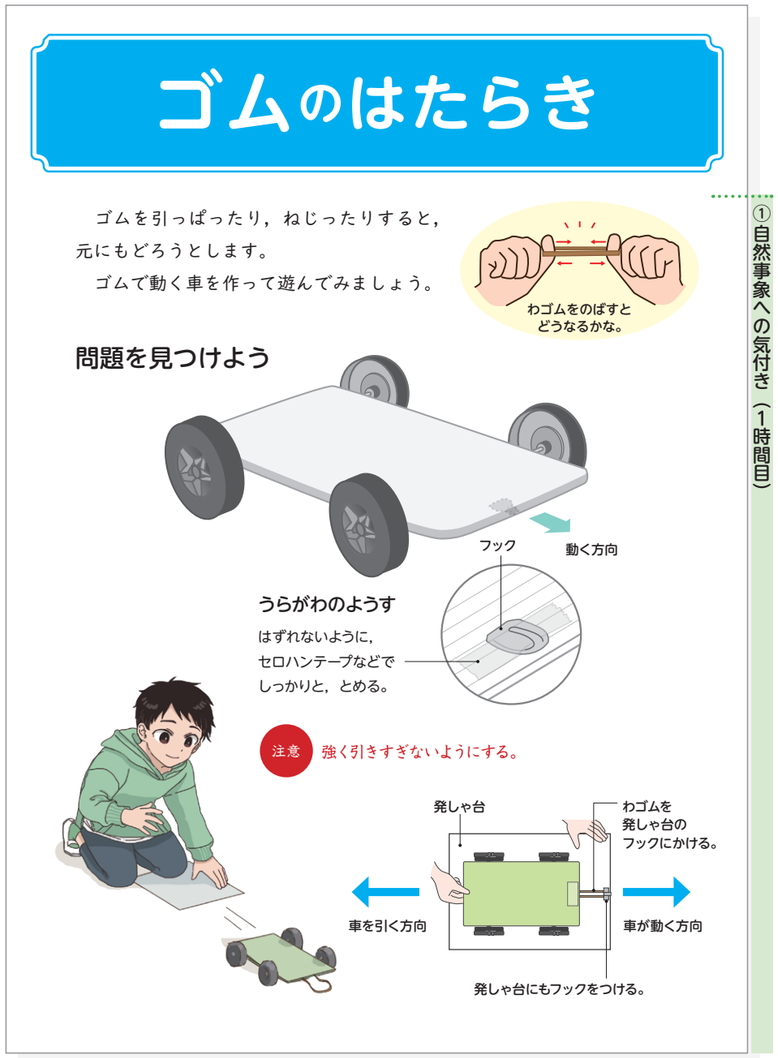
結果を基に，より妥当な考えをつくりだす場面です。グループごとに話し合ったり，学級全体で話し合ったりします。６年で特に重要な場面です。

８．結論【⑧結論の導出】

見いだした問題に対して，問題解決の過程で得た結論をまとめます。結論文は学習指導要領の各項目の内容に対応しています。

ゴムののばし方をかえると，ものの動き方はかわります。
ゴムを長くのばすほど，ものを動かすゴムの力のはたらきは大きくなります。

《－小学3年生－ゴムのはたらき（4時間）指導事例》



（２）「理科の見方・考え方」を確認しましょう。

小学校学習指導要領解説「理科編」から「理科の見方･考え方」を整理すると下の表のようになります。

領域	エネルギー(物理)	粒子（化学）	生命（生物）	地球（地学）
見方	主として量的･関係的な視点	主として質的･実体的な視点	主として共通性･多様性の視点	主として時間的･空間的な視点
	その他：原因と結果，部分と全体，定性と定量　など			
考え方	比較，関係付け，条件制御，多面的に考えること　など			

「見方」とは，「自然の事物･現象をどのような視点で捉えるか」，「考え方」とは，「どのような考え方で思考していくか」ということです。「考え方」は次のように，主に働かせる学年が示されています。３年・比較，４年・関係付け，５年・条件制御，６年・多面的に考えること。

①自然事象への気付き（１時間目）

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ ゴムのはたらき ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

第１次（4 時間）
本時：1 時間目　❶②③④

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ここでは，標準的な教科書の紙面を示しています。この「手引き」を参考に，それぞれの教科書に沿った授業展開を検討してみましょう。

まず，本時の授業に入る前に，教科書の単元全体を読んで概要を把握します。その後，教師用指導書を読んで本時の注意点や指導計画を確認します。

【1 時間目】1. 授業の準備

（１）本時の目標を確認しましょう。

学習指導要領ではこの学習内容の目標を次のように定めています。

○風とゴムの力の働き
風とゴムの力の働きについて，力と物の動く様子に着目して，それらを比較しながら調べる活動を通して，次の事項を身に付けることができるよう指導する。
ア　次のことを理解するとともに，観察，実験などに関する技能を身に付けること。
（ア）風の力は，物を動かすことができること。また，風の力の大きさを変えると，物が動く様子も変わること。
（イ）ゴムの力は，物を動かすことができること。また，ゴムの力の大きさを変えると，物が動く様子も変わること。
イ　風とゴムの力で物が動く様子について追究する中で，差異点や共通点を基に，風とゴムの力の働きについての問題を見いだし，表現すること。

多くの教科書では「風とゴムの力の働き」の学習は風とゴムを別々に扱っていますので，ここではゴムの力の働きに絞って学習展開例を示しています。

本時（1 時間目）の目標は，上記の「イ」の「差異点や共通点を基に，ゴムの力の働きについての問題を見いだし，表現すること」にあります。

【準備】ゴムで動く車の材料を用意します。教科書や教師用指導書をよく読んで，事前に自分で試作してみて，作り方を確認しておきましょう。

【1 時間目】2. 授業中

○問題の設定につながる発言や行動を集めて，整理しましょう。

児童の遊びの中での発言を集めます。発言に迷っている児童には，教科書のキャラクターの吹き出しのセリフを参考にするように声をかけます。教師の問いかけによって，問題の設定につながるようにします。授業の最後に次の時間の問題を設定します。また,教科書で問題を確認しましょう。

ゴムのはたらき

第１次（4 時間）
本時：2・3時間目　①❷❸④

【2・3 時間目】1. 授業の準備

(1) 本時の目標を確認しましょう。

本時（２・３時間目）の目標は，次の２つです。

① 観察・実験などを行い，得られた結果を基に考察し，表現する。
②ゴムの力は，物を動かすことができること。また，ゴムの力の大きさを変えると，物が動く様子も変わることを理解する。

目標は評価の観点と結びついています。

①は「思考力，判断力，表現力等」，②は「知識及び技能」です。評価については教師用指導書を参考にしましょう。

(2) 理科の見方・考え方を確認しましょう。

ここで働かせる主な「理科の見方・考え方」は，「量的・関係的」な見方，「比較する」考え方です。

「量的・関係的」な見方では，ゴムの伸ばし方や車の動く距離などの点が量的な観点，ゴムの伸ばし方によって手ごたえが変わる，ゴムの力の働きが変わる，という点が関係的な観点と整理できます。

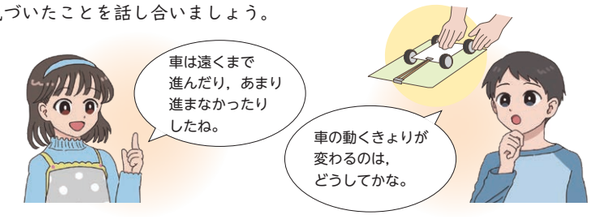
「比較する」考え方では,ゴムの伸ばし方，車の進む距離などの比較が考えられます。

【準備】 実験を行いますので，実験で使う器具の準備をしておきましょう。パソコンやタブレットを使うことも考えられます。

②問題の設定（1時間目）

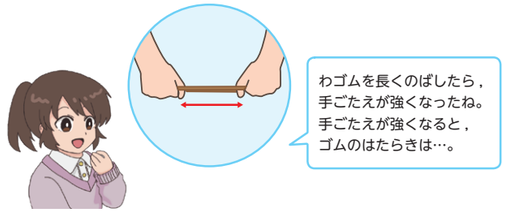
③予想や仮説の設定・④検証計画の立案（2・3時間目）

気づいたことを話し合いましょう。



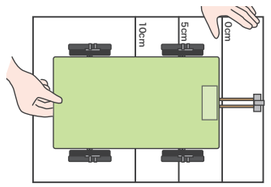
問題　ゴムののばし方をかえると，ものの動き方はどのようにかわるだろうか。

予想　わゴムで車を動かしたことなどから予想しましょう。



計画　どのように調べればよいか考えましょう。

わゴムがのびはじめるところを 0cm として，5cm，10cm のところに線を引く。



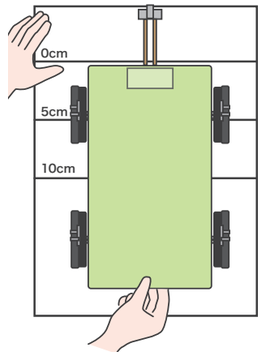
⑤観察・実験（2・3時間目）

じっけん　わゴムののばし方をかえたときの，車の動くきょりを調べましょう。

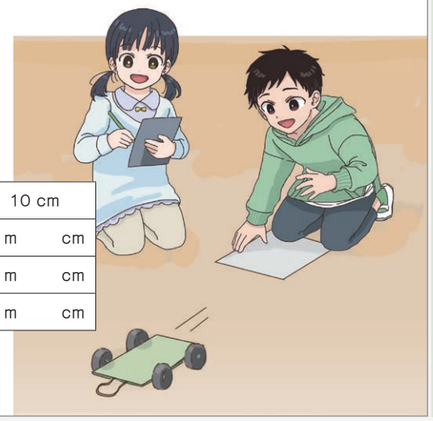
じゅんび：○○○○，○○，○○○，○○○○，○○○

①発しゃ台の 5cm の線まで，わゴムをのばして手をはなし，車がうごくきょりを調べる。くり返し，３回調べる。

②わゴムをのばす長さをかえて，①と同じように調べ，結果を記録する。



注意　強く引きすぎないようにする。



【けっか】

車がうごいたきょり

わゴムをのばす長さ		5 cm		10 cm	
うごいたきょり	１回目	m	cm	m	cm
	２回目	m	cm	m	cm
	３回目	m	cm	m	cm

【2・3 時間目】2. 授業中

○問題の確認

1時間目に設定した問題を確認します。時間の間隔があいた場合は，どんなことに気付いて問題を設定したのか，改めて思い起こさせるような声かけをすると，効果的と思われます。

教科書の問題文は基本的に，学習指導要領の内容に対応する結論が導き出されるように表現が工夫されていますが，児童の発言，行動などを基に教師が問題文を言い換えて進めることもできます。

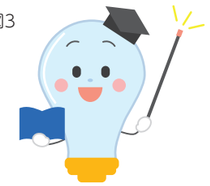
○予想・計画

予想・計画は，重要な要素ですが，教科書の全ての学習単位で必ず表現されているわけではありません。学習内容との関連（予想や計画を考えにくいなど）や紙面の都合で省略されていることもあります。授業の中では，教科書紙面にない場合でも，必要に応じて予想や計画をしっかりと実践していくことも考えられます。予想･計画･実験（観察）･結論の流れが無理なく展開できるように整理しておきましょう。

図1

図2

図3



注）吹き出しのセリフについて
吹き出しのセリフでは，「～だよ。」「～だね。」と明言したり，「～かな。」「～は……。」などと示唆するような発言をする場合があります。発言の仕方に注目して活用してみましょう。

○予想・計画から実験方法を確認

児童の予想・計画の話し合いを基に，学級全体で実験方法を決定します。

実験方法が，設定した問題を解決できる結論を導けるものになるように，教師は話し合いに助言したり，方針を提案したりしましょう。この際，前もって教科書を読んで流れをつかんでおくとよいでしょう。

○実験

実験方法は１つの例として示しています。教科書によって方法が多少異なります。動く車の作り方，車が動く距離の測り方，実験の注意などは，教科書・教師用指導書を参考に，また，物指しや巻き尺の目盛の読み方もしっかり事前準備をしましょう。

動く車は，風の力・ゴムの力，両方の学習で使える想定になっています。

【教科書のキャラクターについて】

教科書には，児童のキャラクター，教師のキャラクター，マスコットのようなキャラクターなどが登場し，吹き出しでさまざまな発言をしています。

教科書によって，種類や役割が多少違っていますが，授業を進める上での参考になるので，主な役割を確認しておきましょう。一般的には，およそ次のような役割が設定されています。

①児童のキャラクター（図 1）

対象学年の小学生の役割です。キャラクターによって学習内容の習熟度などの個性は，さまざまに設定されているようです。個性にしたがって，授業中に想定される発言が表現されています。

②教師のキャラクター（図 2）

児童に質問したり，ヒントを与えたりして，学習活動を目標に近づけます。ときには③のキャラクターが，教師の役割をすることがあります。

③マスコット的キャラクター（図 3）

親しみやすいデザインでアドバイスやヒントを与えます。観察・実験のポイントや見方・考え方の観点を発言することもあります。

○結果

実験（観察）中は，結果を記録していきます。教科書や教師用指導書で結果の記録の仕方を確認し，指導しましょう。オリジナルの理科ノートやワークシートを使うことも考えられます。

ICT 教育の観点で，パソコンやタブレットを使った授業も提案されていますので，文部科学省のウェブサイトなども参考にしましょう。

○考察・結論

考察・結論の過程は，「主体的・対話的で深い学び」に結びつきやすい活動です。結果を基に児童がどのように考え，発言し，話し合い，結論を導いていくのかがポイントです。グループ（児童）によっては結論が異なる場合もありますが，なぜ結論が異なったのかを振り返ることが大切です。このようなときこそ，教師の適切な助言が必要です。グループ（児童）どうしで話し合い，問題を解決するのが理想的です。学級全体で納得して問題解決の目標が達成できるように，教師が話し合いを活性化するように心がけましょう。最後に教科書紙面で結論を確認しましょう。

ゴムのはたらき

第１次（４時間）

本時：４時間目　①②③❹

○確認問題・資料など

単元・小単元の最後には，よくある例として，確認問題や学習内容に関連する読み物資料，活動，発展的な学習内容などが掲載されています。教科書によってさまざまです。

①確認問題（確かめよう，など）

基礎・基本の定着を図るための問題です。全ての児童に取り組ませるようにしましょう。

②読み物や活動の資料

学習内容を広げたり，深めたりすることがねらいです。学んだことが日常生活や社会とどのように関わっているのかを知り，理科の学習の意味を深く掘り下げていくことができます。

③発展的な学習内容

当該学年の学習指導要領を超える内容です。主に上位学年の内容を扱っています。標準授業時数には含まれていませんが，児童の習熟度に応じて扱ったり，学級全体で資料を読んで話し合ったりしてみましょう。ここでも学習の広がりや深まりが期待できます。

⑥結果の処理・⑦考察・⑧結論の導出（2・3時間目）

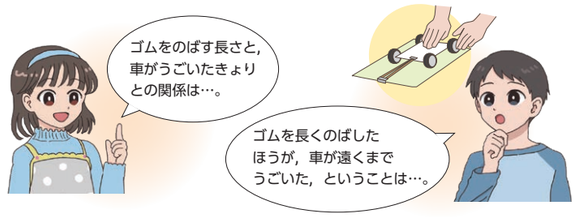
⑨確認問題・資料など（4時間目）

けっか　けっかを表にしましょう。

【けっか】
車がうごいたきょり

わゴムをのばす長さ		5 cm	10 cm
うごいたきょり	1回目	3 m　30 cm	6 m　50 cm
	2回目	3 m　40 cm	6 m　20 cm
	3回目	3 m　20 cm	6 m　40 cm

考えよう　けっかからいえることを考えて，話し合いましょう。



けつろん（まとめ，わかったこと）

ゴムののばし方をかえると，ものの動き方はかわります。
ゴムを長くのばすほど，ものを動かすゴムの力のはたらきは大きくなります。

確認問題・読み物資料など

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□□。

写真など

QR コード

○ QR コード等（QRコードは（株）デンソーウェーブの登録商標です）

令和２年度版の教科書から，紙面に QR コード等が掲載され，各発行者のウェブサイトにあるコンテンツ（動画，PDF 教材，資料のリンク先など）を閲覧することができるようになりました。パソコンやタブレットを使って，利用してみましょう。

○「主体的・対話的で深い学び」と学習の目標

「主体的・対話的で深い学び」は授業改善の視点であり，学習の目標ではありません。学習の目標は，学習指導要領にあるように，資質・能力の育成です。学習評価は資質・能力の観点で行われます。指導計画や評価の観点については，各教科書発行者の教師用指導書やホームページなどで確認できます。

教師から児童への声かけ例・児童の発言例

＊本手引きの教科書紙面の場面設定，キャラクターのセリフなどを参考にした場合の例です。

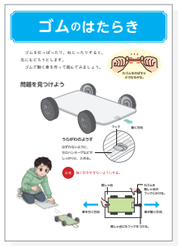
○問題を見つける場面

これまでにゴムを使って遊んだことはありますか？ゴムを使っておもちゃを作ったことはありますか？

生活経験や既習内容の想起を促すように問いかけます。

ゴムの車で遊んでみて，どうしてかな？　と思ったことはありますか。どんなことですか？

児童が答えやすいように，教科書の表現を言い換えて問いかけます。



輪ゴムを伸ばして飛ばしたことがあるよ。

生活科の授業で，カエルのおもちゃを作ったよ。

遠くまで動いた車と，近くで止まった車があったよ。

○問題・予想・計画の場面

どうしたら，車が遠くまで動いたかな。きちんと調べるには，どうしたらよいか考えてみましょう。

児童が「理科の見方・考え方」を働かせて考えやすいように問いかけます。

ゴムを長く伸ばすと，車は遠くまで動くよ。

ゴムを伸ばす長さを決めて，車の動く距離を調べてみよう。

○実験（観察）の場面

古い輪ゴムは使わないようにしよう。伸ばし過ぎると輪ゴムが切れることがあるから気を付けようね。

実験の注意点などをしっかりと伝えます。ここでは発射台を動かさないこともポイントです。

車が動いた方向がちょっと違ったけれど，いいのかな。

このように実験中に出る疑問にも，その場で助言しましょう。この場合は，極端な場合を除いて，同じ方向の大まかな距離を計ればよいこととします。

○結果の処理・考察・結論の導出の場面

ゴムを長く伸ばすと，車は遠くまで動いたかな。
結果の表を使って説明しましょう。

自分のグループの結果からどんなことが言えるか考えるように問いかけます。グループごとの結論を集約し，学級全体の結論とします。目標と異なる結論になったグループには，なぜその結論になったのか実験を振り返るなどの作業を経て，学級全体の結論で納得できるようにします。

ゴムを長く伸ばした方が，車は遠くまで動いたよ。

ゴムを長く伸ばすと，ゴムの力が大きくなって，車は遠くまで動いたんだね。

結論の導出までの過程で，児童が「理科の見方・考え方」を働かせながら，主体的・対話的に議論する中で，このような発言が出てくることが重要です。

外国語（英語）の教科書の使い方

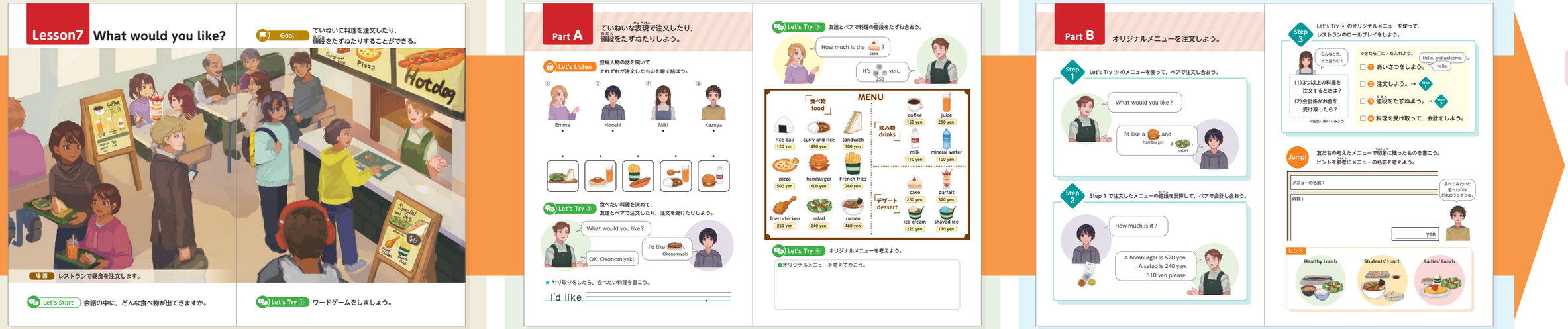
「児童が英語を使う姿」を想像することから単元構想を始める

小学校外国語の教科書は，児童が英語で気持ちを伝え合えるようになるために，いくつもの段階を踏み，少しずつ「できる」に近づいていくように構成されています。しかしながら，「教科書のページを順番に学習しているうちにできるようになる」というボトムアップではなく，「ゴールを見据えて近づいていく」というトップダウンの発想を持って単元構想を練るために，まずは単元全体のページを概観してみましょう。

単元全体の概観

各単元の後半には，児童が行う言語活動が用意されています。日頃指導している目の前の児童の顔を思い浮かべながら，「どんな表現活動をさせたいか」「何を伝えることができるようになってほしいか」を具体的にイメージしてみましょう。教科書に示されている言語活動は一例です。目の前の児童に合わせて，「こんなこともできそう」と考えることからスタートしてみましょう。

単元目標に近づいていく教科書の流れ ▶



導入

担任教師が好きな料理について英語で語って聞かせよう！

そのために…

練習

自分が好きな食材について児童が英語でたくさん言う機会を作ろう！

そのために…

言語活動

オリジナルのメニューを注文させたい！

最初に単元のゴールを決める！

児童を題材に近づける

各単元のはじめには，見開きのダイナミックなページがあります。多様なイラストや写真，さらには，デジタル教科書の動画なども活用して児童を題材に近づけます。

この段階ではたっぷりと音声を聞かせ，題材に対する児童の興味関心を高め，想像力をかき立てます。教科書の場面設定を活かしつつ，児童にとって身近な地域の話題などを取り入れてもいいでしょう。

段階を踏んでできるように導く

ゴールである〔言語活動〕における「伝え合う」ためには，〔練習〕段階インプットや練習が欠かせません。動を児童の反応や習熟度を見ながら繰り返したりすることで，「分かった」を児童に実感させることが大切です。

「伝え合う」を大切に

単元末の〔言語活動〕で児童に何をさせたいかを考えることが，教材研究のスタートになります。児童が自分の気持ちを「伝え合う」ことができるように児童の発想を大切にして，活動をデザインします。

活動では，児童が伝えた内容をとらえて，その内容についてのフィードバックを心がけましょう。

◀ 単元目標から逆算して考える教材研究の流れ

教科書に出てくる題材・活動の流れを知る

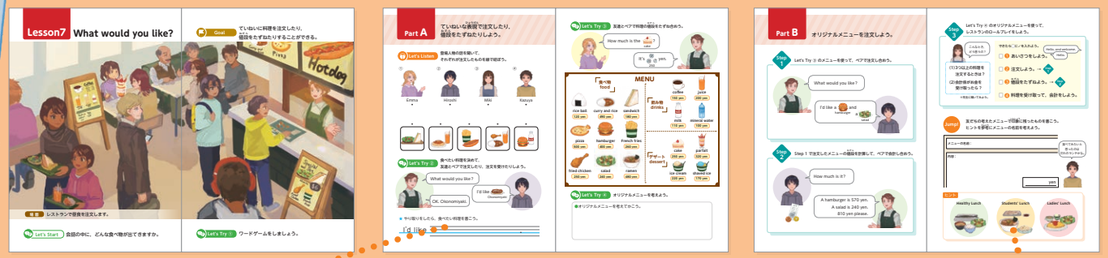
どんな活動が設定されているか

単元の最後にある言語活動に向けて，知っておくべき単語や表現を練習する活動が教科書にはいくつも設定してあります。基本的には音声→文字の順に，あるいは理解→発信の順に活動が並べられています。まずは教師が活動のねらいや内容をよく理解して，児童にも活動の目的をしっかり伝えられるようにしましょう。

活動を観察して，児童の定着度に応じて繰り返す

教科書の活動に取り組む際には，児童の活動の様子を見ながら，必要に応じて回数や順番を変えることも大事なポイントです。新しく学習したばかりの表現にまだ十分に慣れ親しんでおらず，自信を持って言えない児童が多いようであれば，全体で再度確認したり，個別の練習を増やしたりする必要があります。そのためには，まず児童の活動をしっかりと見とることが大切です。

教科書



導 入　児童を題材に近づける

聞く

写真を見ながら
教師の話を聞きます

例えば音声を一回流しただけで，全員が内容を聞き取れているとは限りません。生徒の理解度を見ながら，必要に応じて繰り返しましょう。ALT と JTE で同じ会話を再現したりするのも効果的です。

こうやって
言うのか！

気づく

もう見なくても
言えるもんね

慣れる

どうやって
言おうかな

考える

練 習　段階を踏んでできるように導く

聞く

会話から料理の名前と注文した人の名前を聞き取ります

話す（やり取り）

メニューを見て自分の食べたいものを注文したり，値段を尋ねる会話文を練習します

書く

合計金額を書き取ったり，自分で考えたオリジナルメニューを書き込みます※

話す練習も，隣の人とペアになって数回言ってみただけでは十分とは言えません。その場合は，ペアを替えて何度もやり取りをすることで，自然に慣れ親しんでいくことを目指します。児童の活動の様子を観察することが大事なポイントになります。

※ 小学校における「書く」は「話すためのメモを書く」「例を見ながら書き起こす」などの活動が中心です。

言語活動　「伝え合う」を大切に

話す（やり取り・発表）

これまでに練習した表現を使って，実際に買い物をしたり，店員役を演じたりします。

教科書の言語活動は，小学生が日常生活で経験することや学校行事などを想定したものが多く組み込まれています。学級活動の時間に書いた作文や，他教科の時間に学習した内容をうまく取り入れながら，児童の「表現したい」という気持ちを刺激しましょう。

また，実際に英語でのやり取りを通して，

- 目的地にたどり着く
- 欲しい物が買える
- ポスターを作成する

など，具体的な成果が見える活動を設定すると，意欲的に取り組むようになります。

最後の言語活動では，実際に話したり書いたりすることで，児童が自分の考えや気持ちなどを表現する活動が設定されています。これまでの練習を活かして，児童が自信を持って表現できるように支援したいですね。

また，最後のゴール（山頂）に向かう道は複数あります。「何を言うか」「どう言うか」を児童に考えさせる（山登りのルートを選ばせる）指導も大切です。

教科書をアレンジしてみる（導入・言語活動）

この単元は，題材名 What would you like? から連想できるように，単元末にお客としてレストランで自分の好きな食べ物を注文したり，店員としてお客の対応をしたりする言語活動に取り組む構成になっています。教科書通りに進めることもできますが，児童にとって取り組むべき価値がある，魅力を感じるものとなるよう，教師によるアレンジも可能です。

このページでは単元の始まりである〔導入〕と，単元のゴールとなる〔言語活動〕について，アレンジの具体例を紹介します。指導している児童の関心や習熟度など実態によってアレンジの方向性は様々あります。日頃は他教科も教えている学級担任であれば，他教科・領域で学習した内容を取り入れて「横断的」なアレンジもおすすめです。

導入　ひと工夫で題材をアレンジ

Step 1　身近な話題から始めよう！

学級担任（もしくは専科教員等）と ALT による Teachers' Talk をしましょう。地元にあるレストランや食堂の写真を示しながらやり取りをして児童に聞かせます。

日本食が好きな ALT に，地域にある日本食レストランを紹介しています。

担任 : You like Japanese food. Do you know any Japanese restaurants in our town?
ALT : Not really.
担任 : Look at this photo. Do you know this restaurant?
ALT : No, I don't.
担任 : It's a Japanese restaurant, Edoya.
ALT : Edoya! What can we eat?
担任 : Here's the menu. What can you see?
ALT : Wow. Looks really good!
担任 : Class, what's this?

ALT が喜んでいます。担任が児童を巻き込んでいきます。

児童は単元末に，お客としてレストランで自分の好きな食べ物を注文したり，店員としてお客の対応をしたりする言語活動に取り組みます。児童が必要感や必然性を感じることができるような単元の始まりにしましょう。

単元末の言語活動で使う "What would you like?" "I'd like…." "How much is it?" などに，単元の導入段階から触れさせていくことを意識しましょう。「これが単元末で使われるものになりますよ，こんな場面で使われるのですよ」ということを体感的に捉える機会となります。

Step 2　ターゲット文を何　度も！

どのような場面で使われるのかを実感させながら，ターゲット文（赤字）を聞かせていきます。

児童 : Karaage.
担任 : Right. Japanese style fried chicken. They're very juicy.
ALT : I want to try it. **How much is this? (値段を尋ねる表現)**
担任 : Let's see…. OK, it's …?
児童 : **480 yen!**
ALT : OK. I'll take it.
担任 : **What would you like? (食べたいものを尋ねる表現)**
ALT : Well….
担任 : **How about rice and miso soup? (提案する表現)**
ALT : Good. **How much is rice and miso soup?**
担任 : Class, **how much is rice?**
児童 : **120 yen.**
担任 : Then, **how much is miso soup?**
児童 : **100 yen.**
ALT : Thanks. Rice and miso soup, **please. (丁寧な表現)**

自然な場面・状況の中でターゲット文を使ってみせます。

Step 3　単元末の活動をイメージできるやり取りを

今度は，ALT がイニシアチブを取って話していきます。ALT が行ったことのある地域のレストランの話をします。

ALT がレストランの写真を示して，担任にたずねています。

ALT : Look at this photo. Do you know this restaurant?
担任 : Yes, I do.
ALT : Nice. This is my favorite Italian restaurant in our town. Pizzalia.
担任 : Great. Let's go there together.
ALT : Yes! Here's the menu. **What would you like?**
担任 : **I'd like Margherita pizza. How much is it?**
ALT : **680 yen. Would you like some drink?**
担任 : Yes, please. **I'd like soda, please.**
ALT : Sounds good.

担任と ALT がレストランでのやり取りを実演しています。

ALT が児童を誘って，自分が好きな食べ物を注文しよう，と提案しています。

ALT : OK. **Let's go to the restaurant together and order your own favorite food!**

このように，児童の興味・関心を引きつけ，「自分ごと」として感じられる（自己関連性）状況を作り，児童の背景知識を活性化させます。自然な流れの中で教科書を開本することができるようにしましょう。

言語活動　声掛けで児童の思考を深めさせる

〔思考・判断・表現〕を意識して，児童がより深く考えるためのアレンジ案です。ポイントは，会話の目的を設定することです。決められたものを買ってくるだけでなく，買ったもので何が作れるか，予算の中でどれを買うか，など会話するべき内容を児童が自分で選択する場面を作り出しましょう。また，話し相手との関係性によってはより丁寧に話すなど，話し方の工夫も見られるようになります。教師のちょっとした一言で，児童の思考を深めさせることができます。

1,000 円ぴったりにしてみようか

ぴったりにする商品をます。ちょっ するためには購入選ぶ必要が出てきとした「算数との教科横断型」 授業にも。

バーガー類を全部売り切ろう

店員さん役の児童たちに積極的なセールストークを促します。必死なセールスに対応するお客さん役も工夫が必要になります。

今日買ったもので何が作れる?

野菜や食材などを購入する設定の場合は，買った野菜などでどんな料理ができるかを考えさせることもできます。

値引きをお願いしてみようか

簡単な表現を教えれば値引き交渉も可能です。児童から「なんて言えばいいの?」という声を引き出したいですね。

道徳の教科書の使い方　　オリエンテーションページの活用

道徳科の授業は，学習指導要領に示される道徳科の目標「道徳教育の目標に基づき，よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため，道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習を通して，道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度を育てる」に即して実施される必要があります。ここにあるように道徳科では「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習」が求められていることをまずは確認しましょう。この点について教科書の冒頭のオリエンテーションページで触れられています。

1．児童とともに学習の進め方を確認しましょう（❶）。

各社の教科書のオリエンテーションページでは，この「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習」の記述に即した道徳科の学習の進め方を示しています。各学年の第１回目の授業で，この部分に注目させ，道徳の授業ではこれからどのような学習をしていくのかを確認するとよいでしょう。

最初の授業だけでなく，毎回の授業でも確認するとよいでしょう。また，指導計画を考えるときはもちろん，授業のなかでも「考えを深めましょう」や「自分自身を見つめ直してみましょう」といった声がけをして，道徳科でどのような学習が求められているかを児童に意識させていくようにしましょう。なお，多くの教科書会社が，ここでの説明と各教材での発問等を対応させています。

2．道徳科の学習方法の例を生かしましょう（❷）。

オリエンテーションのページには道徳科での学習の方法が示されています。例えば学習指導要領で示された「問題解決的な学習，道徳的行為に関する体験的な学習」等です。一つの学習方法だけにこだわらず，道徳科で求められる学習が実現できる授業として，効果的と考えられる多様な学習方法を取り入れて取り組んでみましょう。

3．児童とともに内容項目の全体像を見通しましょう。

教科書には必ず内容項目と教材との対応関係がわかる記載があります。オリエンテーションページで内容項目の全体像をわかりやすく図示しているものや，巻末などに表として示しているものがあります。児童とともに，最初の授業で１年間で扱う内容項目の全体像を確認するとともに，毎時の学習においても，どこに位置づけられる学習なのかを意識させながら取り組むとよいでしょう。

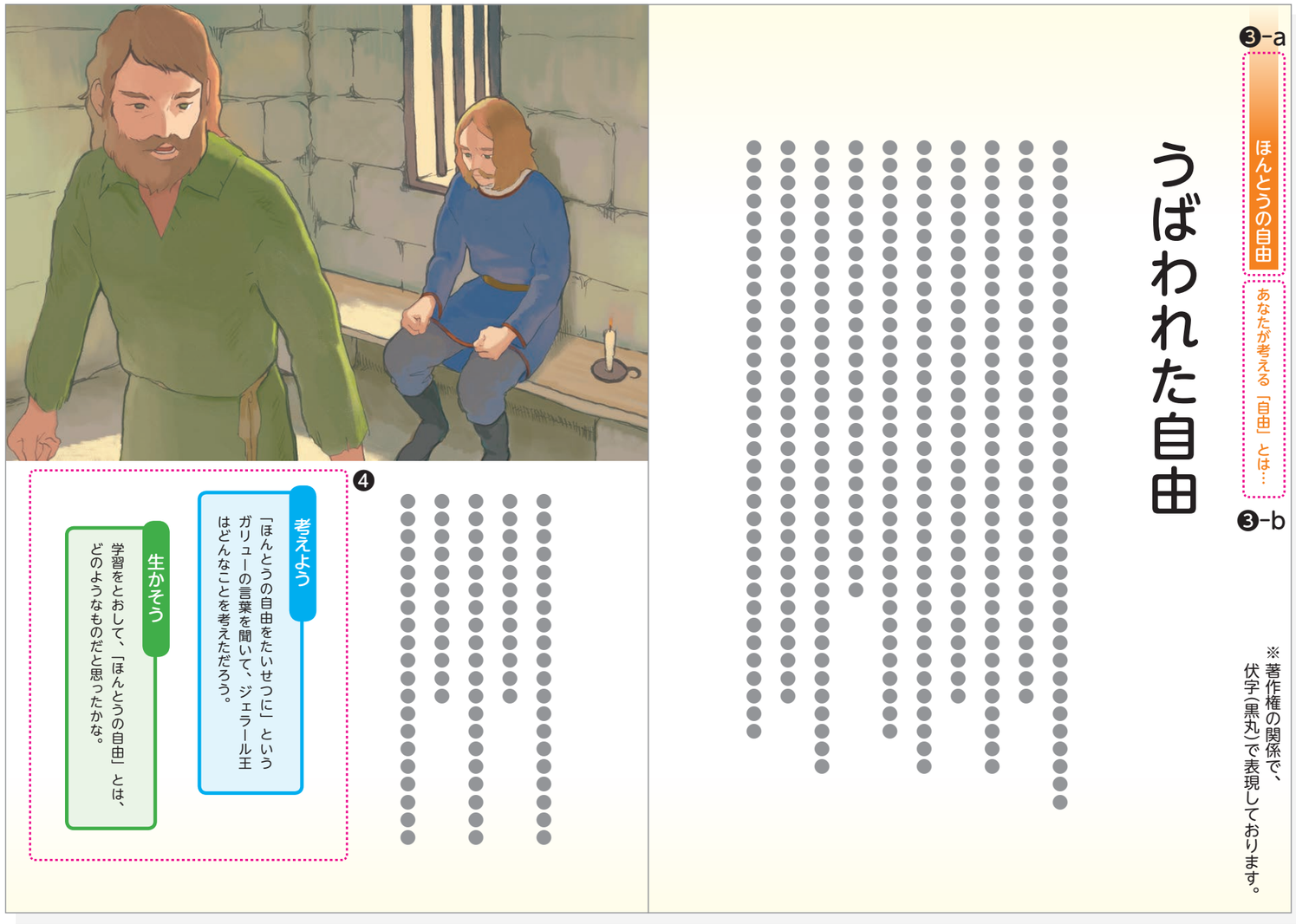
また，道徳科は学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要として実施されるものです。道徳教育の全体計画を踏まえつつ，他の教育活動での児童の学習を補ったり，深めたり，捉え直したり，発展させたりすることができるように，児童とともに他の教育活動との関連を確認しながら，進めていくとよいでしょう。

各時間の進め方

1．ねらいを児童と共有して授業を組み立てましょう。

教科書の教材では，本時のテーマが内容項目からページの右上に設定され（❸-a），テーマについて児童に考えを促す問いかけがなされていることがあります（❸-b）。これらを活用して，本時で何をねらいとしているのかを児童と共有して進めていきましょう。

道徳科の目標は，「道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習」を通して，「道徳的な判断力，心情，実践意欲と態度」を育て，「よりよく生きための基盤となる道徳性」を養うことでした。ただ，他教科と異なり，道徳科では，「達成できた」「できなかった」といった達成目標の考え方ではなく，個々の児童が自らを振り返りながら自己の生き方を主体的に形づくっていく方向性を示すものとして組み立てることが求められます。そのため，指導上のねらいは，例えば，「○○【内容項目に示される道徳的価値】について，……という学習【道徳的諸価値についての理解を基に，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深めるように教材に即して示された学習活動】を通して，～という力を育む」といったように示されます。

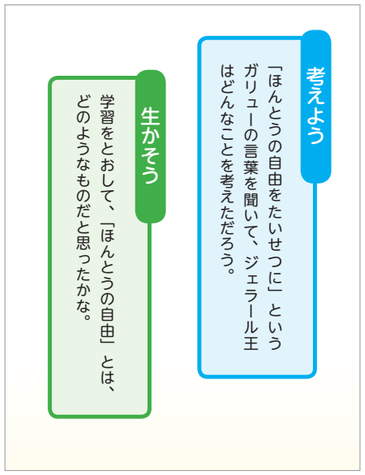


2．教科書の発問を生かしましょう。

（1）道徳科で求められる学習に即して発問を捉えましょう。

教科書の教材では，オリエンテーションページで確認した学習を促す発問が設定されています（❹）。ここで示される発問が，㋐道徳的諸価値についての理解を問うものなのか，㋑自己を見つめさせるものなのか，㋒多面的・多角的に考えさせるものなのか，㋓自己の生き方についての考えを深めさせるものなのか，すなわち，道徳科で求められる学習に即した場合にどこに位置づけられるのかを意識しながら児童に取り組ませるようにしましょう。

オリエンテーションページとの対応関係がはっきりしない発問が掲載されている教科書もありますが，その場合でも㋐～㋓のいずれからの発問であるのかを意識しながら児童に取り組ませることが肝要です。



（2）ねらいに従い，場合によっては発問を取捨選択して学習を進めましょう。

ねらいは児童等の実態に応じて設定されますから，それを達成するために教科書とは別の発問が必要となるケースなどが生じるでしょう。そのときは教科書の発問に追加したり，使用しなかったりといった取捨選択をしつつ，ねらいを達成できるように授業を組み立てましょう。

（3）教科書記載の発問だけでなく，ねらいに迫る発問を中心発問として考えてみましょう。

ねらいに迫るための発問を中心発問といいますが，ねらいによっては教科書記載の発問が中心発問とはならないケースもあるでしょう。その場合は教科書記載の発問だけでなく，新たにねらいに迫る発問を設定するとよいでしょう。

3．教科書に掲載されているテーマ，発問，授業の展開を１つの例として捉えましょう。

「うばわれた自由」は多くの教科書で採用されている教材ですが，そのテーマ，発問，展開は必ずしも同じではありません。テーマを比べてみても，自由とは何かを考えさせようとする教科書が多い一方で，「自分の行動に責任をもって」（教育出版６年）といった設定がなされているものもあります。前者が内容項目に含まれる自由に焦点を当てているのに対して，後者は責任に注目しています。また，発問でも「ジェラール王子には，どのような考え方が必要だったのでしょう。」（教育出版６年），「自由な生き方をしているのは，ガリューとジェラール，どちらでしょうか。」（光文書院５年）などと違いがあります。教育出版の教科書では責任に注目していますから，安易な行動の背後に責任についての自覚がなかった点を考えさせようとしていますし，光文書院の教科書では児童に登場人物を評価させることでより広い視野から考えさせようとしています。このように教科書によって教材の扱いが違うことからわかるように，教科書に示されているテーマ等は１つの例にすぎないと考えてよいでしょう。

無理にテーマを変えたり，発問を新たに追加したりする必要はありませんが，ねらいと児童等の実態を照らし合わせ，より適切な展開，発問等があれば，それに置き換えるということも必要な場合があります。

（出典：「小学道徳６ はばたこう明日へ」教育出版（2020），「小学道徳 ゆたかな心 ６年」光文書院（2020））

教科書の使い方 Q&A

Q 教材を途中で区切って読んでいいのですか？

読み方に制限はありません。ただ，途中で区切ることがねらいの達成にとって不可欠なのかどうかを検討する必要はあります。例えば，「手品師」で友人から大劇場出演の誘いを受けた主人公が迷っている場面で区切って児童に主人公だったらどうするのかを考えさせるとします。ただそこで区切るのは，主人公を批判させたいからでしょうか（㋐）。あるいは，主人公の選択に左右されずに自分の考えを深めてもらいたいからでしょうか（㋑）。それとも主人公の選択をよいもの（正解）としてとっておきたいからでしょうか（㋒）。㋐であれば最後まで読んでから「主人公をどう思う？」と聞いたほうが批判しやすいでしょう。㋑も㋐と同様，主人公の選択を 1 つの選択として児童に理解させたうえで発問した方が多様な視点から考えを深めることにつながるでしょう。㋒は 1 つの正解に向けて児童を追い込む授業になってしまい，自己を見つめ，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深める学習とはいえません。区切ることで道徳科で求められていることから離れてしまうことがあるとすれば本末転倒です。ただし，教材が長い場合，途中で区切って読み，そこまでの状況を整理するということは児童の理解を助けることに役立つことが考えられます。

Q 道徳的価値やねらいを自然に気づか せた方がよいのでしょうか？

道徳の授業では，児童に，「○○が大切だ」（例：「思いやりが大切だ」）と気づかせるのがよいといわれることもありました。しかし，教科書にすでに教材と内容項目の関係は示されていますし，道徳科では内容項目で示される道徳的価値についての理解を基にして学習することが必要なのですから，道徳的価値が大切であるといったことに気づくだけでは，道徳科の授業としては不十分でしょう。

また，ねらいは学習の進め方を踏まえて育てたい方向性を示したものでしたが，これは教師の側から見たものであって，児童の側からみた場合はめあてといいます。めあては当該の時間で児童とともに目指していくものですから，あらかじめ共有することが必要です。例えば，「○○ということについて……という学習を通して～を育む」というねらいを立てた場合，「○○について考えていこう」というようなめあてを設定することができます。

Q 教科書の使用義務の範囲は決まっていますか？

道徳科においても教科書（別冊となっているノートを含む）を使用する義務があります（学校教育法第 34 条）。どの程度使用すれば義務を果たしているのかという基準はありませんが，学習指導要領に示される内容項目をもれなく指導することは求められていますので，年間指導計画編成時に代替教材（自校教材，地域教材を含む）を用いることを決めておくなどして，安易に代替教材で取り組むことは避けるべきでしょう。

とはいえ，年間指導計画を編成する際にはまだ学級が編成されないケースもあるでしょう。実際に児童と会ってみると，年間指導計画のとおりでは十分ではないということも考えられます。また，その教材が担当する学級で使用することが適切とはいえない場合もあるかもしれません。ですから，内容項目をもれなく指導することを前提に，指導の順番を替えたり，学校内で話し合ったうえで代替教材を用いたりすることも考えられるでしょう。

教科書の使用という点では，低学年などの場合，児童に教科書を開かせずにペープサートなどで教材提示する場合もありますが，この場合，教科書を使用したとみなすことができます。

教科書をどの程度どのように使えばよいのかという明確な基準があるわけではありませんが，使用義務があることは確認しましょう。

教科等横断的な学習のための教科書の使い方

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）では，教育課程の編成にかかわって「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」の中に以下のような記述があります。

> 各学校においては，児童の発達の段階を考慮し，言語能力，情報活用能力（情報モラルを含む。），問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう，各教科等の特質を生かし，教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。

また，「教育課程の編成における共通的事項」には，以下のように示されています。

> ・各教科等及び各学年相互間の関連を図り，系統的，発展的な指導ができるようにすること。
> ・児童の実態等を考慮し，指導の効果を高めるため，児童の発達の段階や指導内容の関連性等を踏まえつつ，合科的・関連的な指導を進めること。

教育課程編成の際の視点として教科等横断的な視点が重要であり，学習指導において各教科等及び各学年相互間の関連を図ることが求められています。

これらを踏まえ，ここでは教科等横断的な学習のための教科書の活用方法について紹介します。

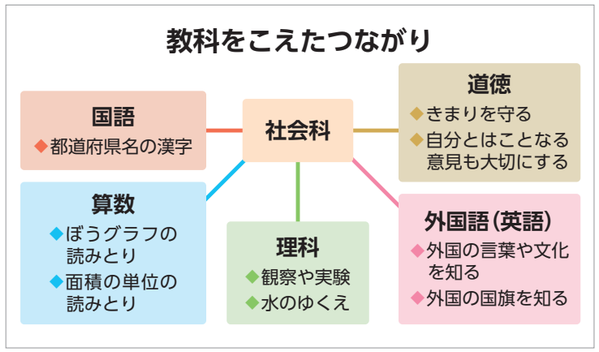
教科等横断的な学習とは・・・

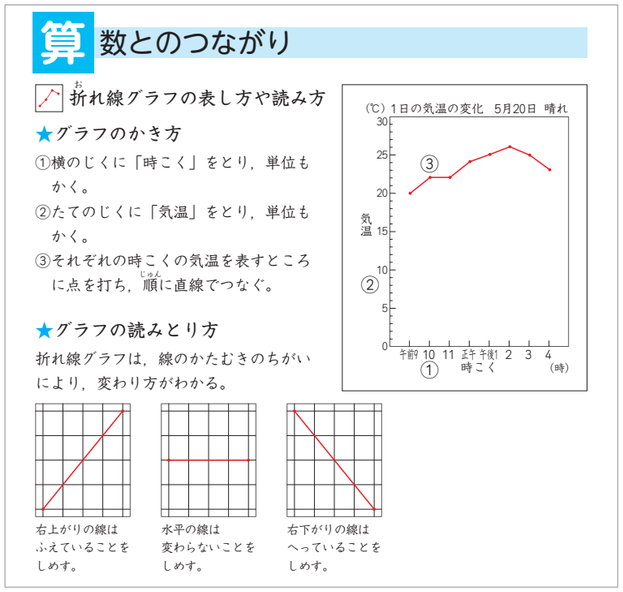
上記の記述を踏まえ，教科等横断的な学習を「各教科等及び各学年相互間の関連を図り，系統的，発展的な指導が構想された学習」とします。児童は教師が意図する・しないにかかわらず，また教育課程内外にかかわらず，教科等横断的に学んでいることは想像できますが，ここでは，主に教師が教育課程において意図的に行う教科等横断的な学習を扱うことにします。

教科等横断的な視点から教科書を見てみると・・・

今期学習指導要領の改訂を受け，どの教科書も教科等横断的な視点が含まれた編集になっています。まずは，教科書に示された教科等横断にかかわる項目やマーク等に注目してみましょう。教科等横断的な視点での学習を進めるためのヒントが示されています。

それぞれの教科書には，教科書の使い方に関する記述があります。右の図のように，各教科の学習をしていく際に，他教科とのかかわりを生かした学習を推奨しています。算数の棒グラフの読み取りや面積の単位の読み取りの学習が，社会科の学習に活用できるということが分かります。教師が，社会科の授業の中の該当する場面で，他の教科の内容に触れたり，教科書を開いてみる場面を設定したりすることによって，児童は他教科等で学んだことを生かして学ぶことのよさが分かってくるでしょう。そういったことの繰り返しが，児童自らが他教科等で学んだことを活用して思考することにつながっていくと思われます。





左の図は，理科の教科書（4年）の「天気と気温」の中の一部です。この学習では，天気による1日の気温の変化を調べ，表に記録します。調べた結果から何が言えるかを考えるために，折れ線グラフに表して考えます。

このとき，算数で学ぶ「折れ線グラフの表し方や読み方」を活用するのです。算数ですでに学んでいれば，それを思い出しながらグラフを作成することになります。もし，まだ学習していないとすれば，時間をとって算数として「折れ線グラフの表し方や読み方」を学習する方法も考えられます。

いずれにしても，教科等横断的な学習にかかわる事項が，教科書にどのように示されているかをあらかじめ把握しておくことが大切です。

活用方法 Q & A

Q１：教科等横断的な学習で教科書を使う場面としてどのようなものがありますか。

Ａ１：授業の中で使う場面と教師が教科等横断的な学習を構想する場面で使うことが考えられます。授業の場面では，その授業の学習内容にかかわって，他教科の教科書の記述内容を活用することができます。授業で学んでいることをより確かにしたり，発展的に学ばせたいと考えたりした場合に対象の教科書を開いて見ることが考えられます。それとは別に教師が年間のカリキュラムを考えたり，授業の事前に教科等横断的な学習の可能性について考えたりするときにも使います。

Q２：限られた時間の中で他の教科の内容も扱うと本来のねらいとする学習内容を扱う時間が足りなくなるのではないですか。

Ａ２：指導計画の通りに学習指導をし，それに加えて他の教科の学習内容も含めて学習するとなると，どうしても予定した時間よりも多くなってしまいます。どの場面で他の教科の学習内容を活用するかについて，年間計画や単元計画作成の際に見通しをもっておく必要があります。見通しをもつことにより，単元の中で重点化する学習が見えてきます。また，他の教科で学習したことを活用して学ぶような授業では，他の教科で学習した内容と重なる部分があったりします。そういうときには，どちらかの教科の学習の時間を短くすることも考えられます。重点化と指導内容の重なりを意識することで時間の問題に対応できるのではないかと考えます。

Q３：児童が主体的に教科書を活用して教科等横断的な学習を行っていくための方法や留意点がありますか。

Ａ３：授業の中で別の教科の教科書を使って関連的な学習を行った場合などに教科等横断的な学習のよさを意味付けることが大切だと思います。「違う教科の学習と結び付けると考えが深まるね」というように，児童の自覚化を図ることが次の学習にもつながっていくものと思います。また，児童は，授業以外でも教科書をよく見ていて，そこから多様な情報を得ています。そのような姿を生かすとすれば，４月当初に各教科の教科書の仕組みや使い方を指導しておくことが有効だと考えます。教科書には教科等横断的な視点で学習を進めるためのヒントが示されていますので，それを児童が理解しておくことも大切です。教師に指示されなくても，関連する教科の教科書を見て学ぶようになると思います。

総合的な学習の時間を中核にした教科等横断的な学習での活用例

中央の表は，総合的な学習の時間を中核にした教育課程を編成しているＡ小学校第４学年のカリキュラム表です。このカリキュラム表を例に，教科等横断的な学習での教科書の活用例を紹介します。

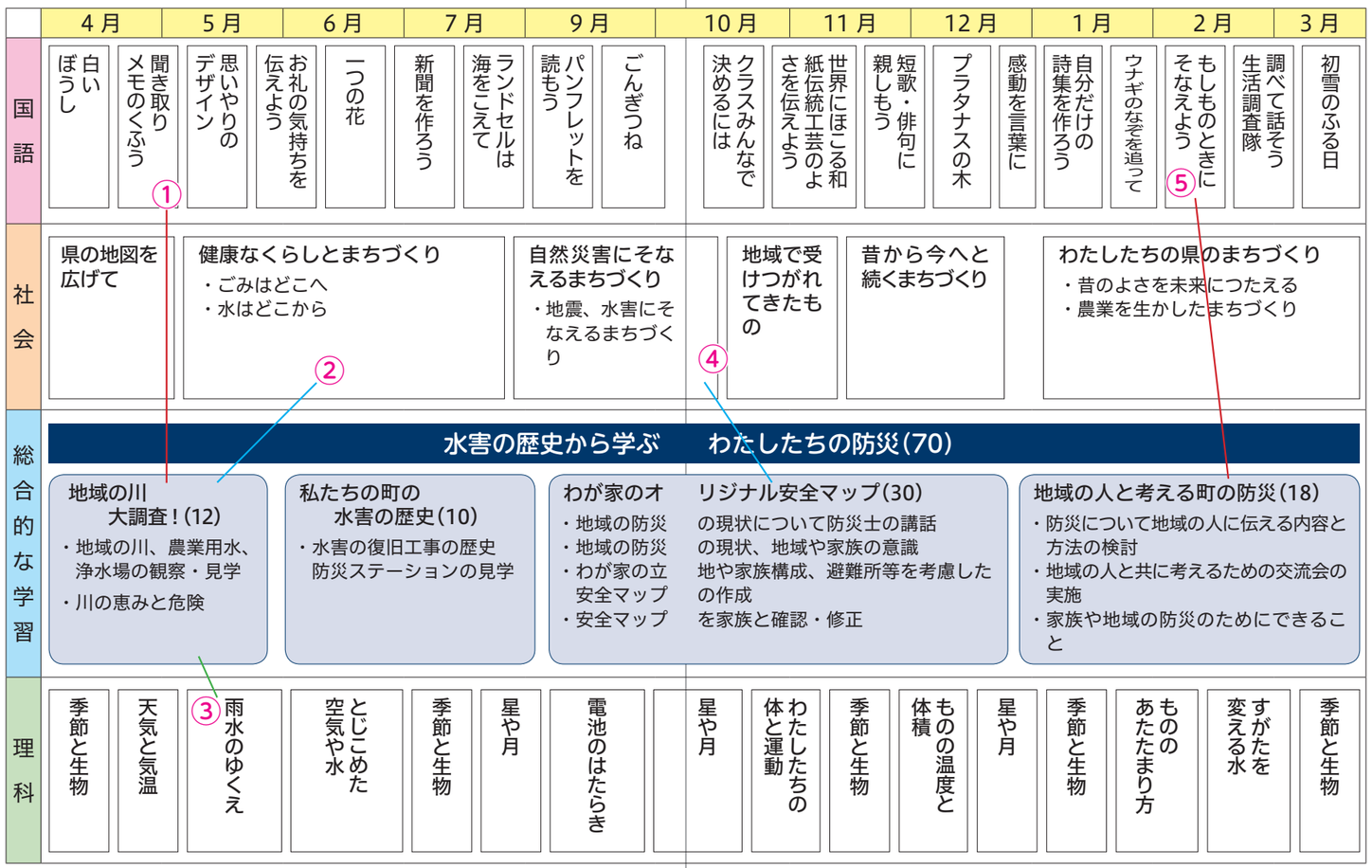
カリキュラム表

１年間に学習する各教科等の単元を一覧にしたものです。
関連的な指導を行う単元を線でつなぐなどすることで，教科等横断的な学習を行うための助けになると思われます。

総合的な学習の時間「水害の歴史から学ぶ　私たちの防災」

Ａ小学校は，大きな二つの川に挟まれた地域にあり，数年前も川の堤防が決壊し，浸水被害が発生している。川は水害を引き起こし，生活や自然にとって危険なものである一方，飲み水，農業用水，生物等を育む，なくてはならないものである。水害を受けつつも復興し，川と共存してきた地域の人々の歴史や取組をもとに防災の在り方を探究する。

A 小学校第４学年　カリキュラム表



国語「聞き取りメモのくふう」の活用 ①

地域の川にでかけ，場所や天候による川の流れの違いや周囲の様子などを観察したり，農業用水や浄水場を見学したりする活動では，メモを取る場面があります。

ここでは，国語の「聞き取りメモのくふう」を活用することができます。国語の学習では，「話を聞きながらメモを取ってみる」→「メモの取り方のくふうについて考える」→「くふうしてメモを取り，メモを使って発表する」→「目的に合ったメモの取り方を考える」というような順で，メモの取り方を学びます。

総合的な学習の時間で見学に行く際に，「国語の学習で学んだメモの取り方を生かしてメモを取ろう」というような声がけをすることによって，国語の学習を役立てようと意識するでしょう。「他教科の学習が役立つ」という実感が得られれば，学習したことの定着につながり，他の学習にも転用されていきます。

社会「健康なくらしとまちづくり」の活用 ②

農業用水や浄水場の観察・見学を通して，川の水が飲料水や農業用水として必要不可欠であり，人々の努力によって守られていることを実感的に理解します。

ここでは，社会の「健康なくらしとまちづくり」の学習を生かすことができます。学習指導要領には，「飲料水，電気，ガスを供給する事業は，安全で安定的に供給できるよう進められていることや，地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立っていることを理解すること」が挙げられています。社会で得た知識を含めて，川の恵みについての考えを多様にしていくことが期待できます。また，総合的な学習の時間での浄水場の見学が社会の学習にも生かされます。

理科「雨水のゆくえ」の活用 ③

地域の川にでかけ，場所や天候による川の流れの違いや周囲の様子などを観察したり，農業用水や浄水場を見学したりする活動があります。

ここでは，理科の学習「雨水のゆくえ」を活用することができます。理科で得た，「水は，高い場所から低い場所へと流れる」「水の流れる方向は，地面のかたむきと関係がある」「水のしみこみ方は，土のつぶの大きさによってちがいがある」「水がしみこみやすい川としみこみにくい川がある」というような知識は，地域の川が引き起こす災害の原因を考えるときの情報となります。

社会「自然災害にそなえるまちづくり」の活用 ④

地域の防災の取組を調べたり，地域の人々や家族の防災についての意識を知ったりしたうえで，「わが家のオリジナル安全マップ」を作成する活動を行います。

ここでは，社会の「自然災害にそなえるまちづくり」を活用することができます。学習指導要領に示された内容には，「地域の関係機関や人々は，自然災害に対し，様々な協力をして対処してきたことや，今後想定される災害に対し，様々な備えをしていることを理解すること」とあります。児童は，行政や地域の取組を踏まえて，自分の家族の防災を具体的に考えることができます。社会の学習を生かして，自分の家族に合った安全マップを作成することで，防災を自分ごととして考えるようになります。

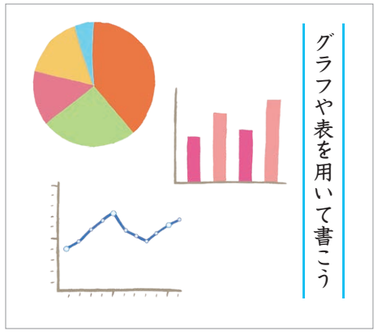
国語「もしものときにそなえよう」の活用 ⑤

地域の人と一緒に自分たちの町の防災について考える活動を行います。自分たちが学んできたことを整理して地域の人に紹介し，それに対しての意見をもらい，自分の防災についての考えを確かにしていきます。

ここでは，国語の学習「もしものときにそなえよう」を活用することができます。国語の教科書には，「テーマを決めて調べよう」→「調べたことを整理しよう」→「組み立てをたしかめよう」→「考えを伝える文章を書こう」というように，相手に伝えるための文章を書く手順や文章の構成などが示されています。国語の学習を活用して町の人に伝えるための文書を書くことが考えられます。また，国語の学習のテーマを防災に関わることにすれば，総合的な学習の時間と国語の指導内容を同時に学習することができます。一つの学習活動で両方の学習ができるので，どちらかの学習の時間を短縮することもできます。

教科等横断的な学習での活用例

国語科，社会科，算数科の教科横断

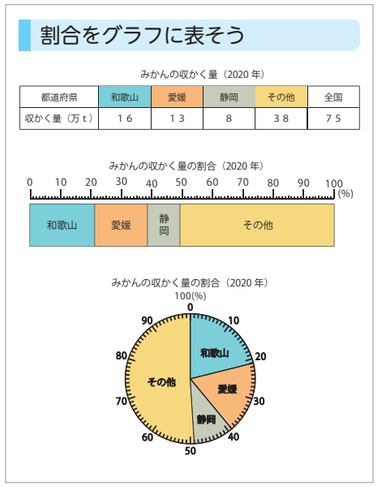


第５学年の国語科では，「B 書くこと」の「題材の設定」において，「目的や意図に応じて，感じたことや考えたことなど」から書きたいことを見付けたり選んだりすることが示されています。また，「情報の収集」及び「内容の検討」では，「集めた材料を分類したり関係付けたりして」伝えたいことを明確にすることが示されています。

このことから教科書では調べたことを正確に伝える取組やグラフや表を用いるなど資料を活用して効果的な文章を作成する取組が用意されているのです。

このグラフや表を用いる際に，算数と関連させることができます。例えば，クラスの仲間の意見を表やグラフで表す場合であれば，第５学年の算数の教科書を見ることによって，書き方を確認することができます。また，棒グラフや折れ線グラフを利用するときには，それぞれ第３学年，第４学年の教科書を確認することで，書き方やどのような事柄に対して，どのグラフを利用したら良いのかなどを確認することができます。表やグラフで物事を表すことにより，説得力のあるものになるだけでなく，伝えたい事柄を視覚的に分かりやすく伝えることができるようになることから，国語科と算数科の学習を関連づけて学習することの良さが感じられるのではないでしょうか。

さらには，文章を作る際に，社会科と関連させることで，子どもが文章を作る取り組みができます。例えば，５年生の社会科では，我が国の国土の自然環境と国民生活との関連について，学習の問題を追求・解決する活動を通して，「各種資料で調べ，まとめること」の知識・技能を身に付けることが示されています。



また，「国土の自然環境の特色やそれらと国民生活との関連を考え，表現すること」の思考力，判断力，表現力を身に付けることが示されています。

社会科の学習での学びを元に自分の考えを様々な資料から調べたことを根拠にして文章化し，表やグラフを利用することで根拠を示したり視覚的に理解しやすいものを作成したりすることができるのではないでしょうか。

こうした教科横断的な学習は，先に示した年間のカリキュラムを作成する際に，各教科・領域の学習内容を十分に把握することで可能となります。時には，他の学年での学びを活かす学習もあります。その際は，他の学年の学習内容を教師自身が見直しておくことが重要です。

国語科と道徳科の教科・領域横断

４学年の国語科では，「記録や報告などの文章を読んで話し合う」ことや「様々な内容の文章と出会わせる」ことが学習指導要領で謳われています。

そのため，教科書では，事実に基づいて書かれた本（ノンフィクション）を読み，そのよさを友達と伝え合うというという読書単元が組まれています。

また，教科書では，ドキュメンタリー・ルポルタージュ・伝記という３つのジャンルから本が数冊ずつ紹介され，その中の一冊が教材として掲載されています。そして，教材で扱われている社会問題について話し合うという学習の流れなのです。

しかしながら，実際の授業場面では，一読するだけで終わってしまったり，逆に，説明的な文章を読解するような授業に偏ってしまったりして「幅広い読書」や「本の内容について話し合う」ことを実現するような読書単元には至らないことが多いのではないでしょうか。

そこには，子どもたちが主体的に，そして必要感をもってノンフィクションの本を読むような状況や場がないという問題があります。それは，ノンフィクションの書籍を通して社会問題について話し合うまでの動機が国語科では生起しにくいという根本的な矛盾なのです。

そこで大切になってくるのが，教科・領域を横断するという概念です。ここでは，道徳科との領域横断として，道徳的価値に着目したいと思います。道徳科の教科書には，下のような道徳的価値の一覧が並んでいます。

例えば，ここにある「相互理解，寛容」「公正，公平，社会正義」などは，ノンフィクション作品でよく取り上げられる社会問題の根底にある道徳的価値と言えます。

道徳科としては，こうした道徳的価値にリアルに迫ることをねらいとし，道徳科の教科書の読み物教材ではなく，実際に起きている社会問題，つまりはドキュメントやルポなどを読んで，「考え議論する」道徳や哲学的対話へといざなうことができるのではないでしょうか。

このようにして，国語と道徳をうまく関連させていくことで，両者の学習の目的がはっきりとしてきます。それは，子どもの学びが主体的・対話的になるということです。そして，国語でもなく道徳でもない新しい学びが対話によって生まれてくるとも言えるでしょう。

授業のポイントは，教師が何かを教えようとせず，その社会問題や道徳的価値について，教師自身が自分事として考え，子どもと一緒になって主体的・対話的に授業に参加するということです。教科・領域横断，そして対話の可能性はまだまだ果てしなくありそうです。

主として人との関わりに関すること	親切，思いやり
	感謝
	礼儀
	友情，信頼
	相互理解，寛容
主として集団や社会との関わりに関すること	規則の尊重
	公正，公平，社会正義
	勤労，公共の精神
	家族愛，家庭生活の充実
	よりよい学校生活，集団生活の充実
	伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する態度
	国際理解，国際親善

● 教科書とは？

（1）教科書の定義①（文科省HPより）

教科書とは、教科書の発行に関する臨時措置法において「小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、中等教育学校及びこれらに準ずる学校において、教育課程の構成に応じて組織排列された教科の主たる教材として、教授の用に供せられる児童又は生徒用図書であり、文部科学大臣の検定を経たもの又は文部科学省が著作の名義を有するもの」とされています（第２条）。

（2）教科書の定義②（文科省 HP より）

教科書は正式には「教科用図書」といい、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校などの学校で教科を教える中心的な教材として使われる児童生徒用の図書のことです。我が国では学校教育における教科書の重要性を踏まえ、原則として上記の学校では文部科学大臣の検定に合格した教科書を使用しなければなりません。（学校教育法）

● 授業における教科書の使い方に関する 調査研究委員名簿

＜企画運営部会＞

新井　郁男　　星槎大学特任教授（委員長）
天笠　　茂　　千葉大学教育学部名誉教授（副委員長）
松本　　修　　玉川大学大学院教育学研究科教授
谷田部玲生　　桐蔭横浜大学法学部教授
西村　圭一　　東京学芸大学大学院教育学研究科教授
鳩貝　太郎　　東京都立大学客員教授
星野　由子　　千葉大学教育学部准教授
走井　洋一　　東京家政大学家政学部教授
松井千鶴子　　上越教育大学教職大学院教授
山本　智子　　光村図書出版㈱編集本部副本部長
加野島行宏　　教育出版㈱関連事業部事業管理課
藤原　智志　　㈱新興出版社啓林館数学編集部第1課課長
中村　　潤　　大日本図書㈱編集局長
坂田　輝久　　東京書籍㈱編集局英語編集部
山田　和代　　日本文教出版㈱編集部部長
細野　二郎　　教科書研究センター参与・特別研究員

＜国語部会＞

松本　　修　　玉川大学大学院教育学研究科教授（主査）
山本　智子　　光村図書出版㈱編集本部副本部長
小林　一貴　　岐阜大学教育学部教授
佐藤多佳子　　上越教育大学大学院教育学研究科教授
山口　政之　　敬愛大学国際学部教授
坂口　京子　　静岡大学教育学部教授
桃原千英子　　沖縄国際大学総合文化学部准教授
西田　太郎　　東京福祉大学短期大学部専任講師
井上功太郎　　美作大学生活科学部専任講師
脇﨑まいこ　　粟国村立粟国小中学校教諭
橋本　祐樹　　世田谷区立等々力小学校教諭
鈴木　真樹　　相模原市立富士見小学校指導教諭

＜社会科部会＞

谷田部玲生　　桐蔭横浜大学法学部教授（主査）
加野島行宏　　教育出版㈱関連事業部事業管理課
大澤　克美　　東京学芸大学教職大学院教授
齋藤幸之介　　多摩市立諏訪小学校校長
山内　敏男　　兵庫教育大学学校教育学部教授
石本　貞衡　　練馬区立大泉中学校主幹教諭
小山　茂喜　　信州大学学術研究院総合人間科学系教授
吉村功太郎　　宮崎大学教育学部教授

＜算数・数学部会＞

西村　圭一　　東京学芸大学大学院教育学研究科教授（主査）
藤原　智志　　㈱新興出版社啓林館数学編集部第1課課長
鈴木　詞雄　　創価大学大学院教職研究科教授
松島　　充　　香川大学教育学部准教授
五十嵐一博　　元・淑徳大学教授
佐藤　寿仁　　岩手大学教育学部准教授
本田　千春　　東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭
久保　良宏　　北海道教育大学名誉教授
村田　祥子　　江東区立第四砂町小学校主任教諭
小栁　直人　　江東区立深川第四中学校教諭
菰田　一史　　さいたま市立美園南中学校教諭

＜理科部会＞

鳩貝　太郎　　東京都立大学客員教授（主査）
中村　　潤　　大日本図書㈱編集局長
山下　修一　　千葉大学教育学部教授
松原　静郎　　国立教育政策研究所名誉所員
宮内　卓也　　東京学芸大学先端教育人材育成推進機構教授
西出　和彦　　仁愛大学人間生活学部教授
加藤　圭司　　横浜国立大学教育学部副学部長

＜外国語部会＞

星野　由子　　千葉大学教育学部准教授（主査）
坂田　輝久　　東京書籍㈱編集局英語編集部
阿野　幸一　　文教大学国際学部教授
臼倉　美里　　東京学芸大学教育学部准教授
奥住　　桂　　帝京大学教育学部講師
田村　岳充　　宇都宮大学共同教育学部助教

＜道徳部会＞

走井　洋一　　東京家政大学家政学部教授（主査）
山田　和代　　日本文教出版㈱編集部部長
鈴木　明雄　　麗澤大学大学院学校教育研究科特任教授
中野　啓明　　新潟青陵大学福祉心理学部教授

＜横断部会＞

細野　二郎　　教科書研究センター参与・特別研究員（主査）
新井　郁男　　星槎大学特任教授
天笠　　茂　　千葉大学教育学部名誉教授
松井千鶴子　　上越教育大学大学院学校教育研究科教授
清水　雅之　　上越教育大学大学附属小学校長
高橋　栄介　　上越市教育委員会学校教育課指導主事

（令和４年10月現在）

● 教科書ができるまで

教科書協会「教科書発行の現状と課題」より

1～2年目　STEP 1　調査・編集（検定提出まで2年で行います）

編集者

企画（調査含む）スタート

数年先に使用されることを考え合わせ、綿密な調査を実施。すべての児童生徒にわかりやすい教科書を目指し、多角的に検討して企画を立案。

編集委員

原稿執筆と審議

多数の著者による原稿の執筆と、編集会議などでの原稿審議を繰り返し実施。多くの時間をかけて、最終原稿を作成。

デザイナー・イラストレーター・カメラマン

図版・資料の作成とレイアウト

学びやすく理解しやすい挿絵や写真の作成と、紙面デザインの設計。著作物の掲載には多大な労力と時間、コストが必要となる。

校正・校閲者

誤りをなくすための厳重な確認作業

誤った記載や誤解を与える記述などをなくすための確認作業を、多人数で多数回実施。

3年目　STEP 2　検定

検定申請

教科書発行者　　文部科学省

検定審査開始
▼
検定意見の通知
▼
検定意見に対する修正
▼
検定合格

約1年間

4年目　STEP 3　採択

見本本提出

教科書採択のための見本作成
▼ 発行者より全国の関係各所に送付
自治体などにおいて使用する教科書を検討
▼
採択決定

STEP 4　製造・供給

訂正申請

実際に使用する供給本の準備

供給本を製造する前に、資料などの更新や、内容の再確認を実施。訂正する必要が生じた場合は、文部科学省に訂正申請を行う。

5年目　STEP 5　使用開始

訂正申請

記述の訂正・更新

使用開始後であっても、訂正が必要になったものについては訂正申請を行う。統計データなどの資料を最新の情報に更新するなど、毎年訂正を行う教科書も多い。